

國學院大學文学部考古学実習報告 第15集

小馬背遺跡

長野県木曽郡開田村

1988

國學院大學文学部考古学研究室

序

土器の製作使用、弓矢の発射、犬の飼育などは人類の歴史を一段と前進させるものであり、これによって日本列島の旧石器文化に終止符を打ち、新たな縄文文化の発展を促したのである。本学では、考古学実習の一環として、この大変革期即ち縄文時代草創期の解明に取組みながら、昭和54年以来、新潟県壬遺跡、山形県北堂C遺跡などの発掘調査を実施し、多大なる成果を挙げてきたところである。

そして昭和62年度には、実習研究の場を開田高原に移して、小馬背遺跡の発掘を行うこととなり、ここにその報告書を上梓する。これは実習生はもとより、多数の自主参加学生とともに木曾御岳山を背にした十日間の生活記録でもあり、いわば我々の個人的な自分史の一頁ともなるべきものもある。

開田高原は草創期を代表する柳又ポイントの本場である。縄文文化開幕当初の核心地帯の一つである。この重要性に最も早くに着目したのは藤沢宗平、樋口昇一、森嶋稔氏等であり、次いで、山下生六、神村透氏等の研究が続いた。此度の調査もまた、これら諸先輩の研究成果の上に初めて実現したものである。

こうした調査の計画実行には、まさに文字通り各方面から有形無形の御指導ならびに御協力を賜った。とくに、長野県教育委員会文化課、開田村教育委員会をはじめ神田正知村長、青樹操前村長、千村博男教育長ならびに山下生六、神村透、樋口昇一、丸山徹一郎の諸氏の御指導と御支援、そして遺跡の発掘について御理解を示され、御許可下さった地主の青樹健一、奥原彰氏の御好意等々に対して衷心より謝意を表するものである。

さらに市郷学園理事長末岡熙章氏は開田高原研修センターの利用を快く御認め下さるとともに、本調査の計画段階より種々御指導と御力添えを賜った。銘記して感謝申し上げる次第である。

また、その他現地で考古学の御指導ならびに親しく激励を頂戴した多くの方々も忘れることはできない。

その名を巻末に掲げさせていただいた。多謝。

國學院大學文学部教授

小林 達雄

例　　言

1. 本書は昭和62年度國學院大學文学部考古学実習の一環として実施した長野県木曽郡開田村小馬背遺跡における発掘調査の概報である。
2. 発掘調査は國學院大學文学部長荻久保泰幸が主体者となり、文学部教授小林達雄が担当し文学部助教授吉田恵二・考古学資料館学芸員青木豊・文学部助手谷口康浩が調査員として専従し、考古学専攻生12名がこれにあたった。
3. 発掘調査は昭和62年9月7日から9月16日まで、10日間にわたり実施した。
4. 遺物・記録類の整理作業および本書の編集作業は國學院大學考古学実習室において行った。
5. 発掘調査および整理作業には実習生のほか、多くの方々の参加協力を得た。御芳名を巻末に記して謝意を表する次第である。
6. 本文の執筆は小林達雄の指導のもと、実習生が中心となって協議分担した。文責は本文目次に記した。写真撮影は猪熊・三浦が担当した。
7. 本書の編集は小林達雄の指導のもと、実習生全員で行い、吉田恵二・青木豊・谷口康浩の助言を得た。
8. 本書に掲げた遺跡実測図等におけるレベルは海拔1,188.20mに統一した。
9. 本書の写真図版に掲げた遺物写真は、すべて原寸大である。
10. 遺跡の地図は国土地理院発行の1:25,000木曽西野を転載した。
11. 今年度の調査において出土した遺物および記録類は、國學院大學において保管している。

目 次

序	小林達雄
例言	
目次	
		頁
第Ⅰ章 小馬背遺跡発掘調査に至る経緯	(猪熊) 1
第Ⅱ章 開田高原の環境と遺跡	2
第1節 開田高原の環境	(西海) 2
第2節 開田高原の遺跡	(福本) 3
第3節 小馬背遺跡の位置	(松島) 6
第Ⅲ章 発掘調査の方法とその経過	8
第1節 概要	(宮尾) 8
第2節 調査区の設定	(猪股) 8
第3節 グリッド別発掘調査の経過	10
A - 1 ~ 3 区	(西海) 10
A - 4 ~ 5 区	(原田) 10
A - 6 ~ 7 区	(中山) 10
A - 8 区	(猪股) 11
B - 1 ~ 2 区	(井坂) 11
B - 3 ~ 4 区	(三浦) 11
B - 5 ~ 6 区	(福本) 11
B - E - 7 ~ 8 区	(猪股) 11
第Ⅳ章 遺跡の基本層序	(中山) 13
第Ⅴ章 遺物とその出土状況	14
第1節 遺物の出土状況	(猪熊) 14
第2節 調査区出土の石器及び周辺部採集の石器	(井澤・岡田・原田) 14
第VI章 周辺遺跡採集の遺物	19
第1節 西又遺跡採集の遺物	(松島・猪股・井坂) 19
第2節 柳又遺跡 A 地点採集の遺物	(西海・中山) 24
第3節 越遺跡採集の遺物	(三浦) 25
第VII章 考察	27

第1節 発掘調査の成果と問題点.....	(福本・井坂) 27
第2節 石器に関する考察.....	28
第1項 有舌尖頭器の分類.....	(岡田・宮尾) 28
第2項 石鐵の分類.....	(井澤・三浦) 33
第3項 石器の材質について.....	(中山) 35
おわりに.....	(宮尾) 37
発掘関係者一覧.....	38
図版 (写真)	

挿 図 目 次

	頁
第1図 遺跡の位置と周辺遺跡	4
第2図 調査区と周辺地形図	9
第3図 調査区土層断面図	13
第4図 遺物平面分布図・遺物垂直分布図	15
第5図 小馬背遺跡出土の石器	17
第6図 西又遺跡採集の石器（1）	20
第7図 西又遺跡採集の石器（2）	21
第8図 西又遺跡採集の石器（3）	22
第9図 西又遺跡採集の石器（4）	23
第10図 柳又遺跡A地点採集の遺物	25
第11図 越遺跡採集の石器	26
第12図 石器の器種分類	29
第13図 有舌尖頭器の分類	30
第14図 有舌尖頭器の比較	31
第15図 有舌尖頭器形態グラフ	31
第16図 石器の分類	34

表 目 次

	頁
第1表 周辺遺跡地名表	5
第2表 有舌尖頭器計測表	31

図版目次

- 図版1 開田高原下の原全景（城山山頂より）
- 図版2 (1) 小馬背遺跡遠景
(2) 小馬背遺跡近景
- 図版3 (1) 発掘状況A・B-1~7区
(2) 発掘状況A・B-8区、C-E-7・8区
- 図版4 (1) 基本層序A-7区
(2) 基本層序A-8区
- 図版5 (1) 耕作機械による搅乱の状況A-1区
(2) 耕作機械による搅乱の状況D-7区
- 図版6 小馬背遺跡出土石簇
- 図版7 (1) 小馬背遺跡出土有舌尖頭器
(2) 小馬背遺跡出土二次加工のある剝片
(3) 西又遺跡採集鎌先形尖頭器
- 図版8 西又遺跡採集鎌先形尖頭器
- 図版9 西又遺跡採集石簇
- 図版10 西又遺跡採集有舌尖頭器
- 図版11 (1) 柳又遺跡A地点採集石器
(2) 柳又遺跡A地点採集土器
- 図版12 越遺跡採集石器
- 図版13 発掘作業風景
- 図版14 (1) 発掘作業風景
(2) 整理作業風景
- 図版15 九蔵峠より開田高原・御嶽山を望む

第Ⅰ章 小馬背遺跡発掘調査に至る経緯

本学文学部では、昭和54年度より考古学実習の野外活動の一環として、各地で学術発掘調査を実施している。そして、その調査地点の選定にあたっては、縄文草創期文化の解明を一貫したテーマとして掲げてきた。これまでにも5次にわたる新潟県壬遺跡、2次にわたる山形県北堂C遺跡の調査を行い、円孔土器の発見など、いくつかの重要な成果をあげてきた。このたび長野県開田高原を調査地として選定したのも縄文草創期文化究明を目的としたものである。

開田高原は、旧石器時代および縄文時代草創期の遺跡が密集する地域として早くから著名である。昭和31年の藤沢宗平氏を中心とする信州ローム研究会による古屋敷遺跡の調査を嚆矢として、今日に至るまで、柳又遺跡や西又遺跡をはじめとする多数の遺跡が知られてきている。なかでも昭和34年から4次にわたって行われた柳又遺跡の発掘調査は、有舌尖頭器の発見を通じて縄文文化の起源に関する重要な問題を提起し、縄文草創期の具体的な研究の第一歩をなすものであった。また、続く西又遺跡や小馬背遺跡の調査においても有舌尖頭器や槍先形尖頭器、片刃打製石斧などのおびただしい石器が出土し、草創期研究に重要な資料を提示した。それらの調査成果は、県史考古資料編や信濃誌上に発表されてきたところである。

開田高原における発掘調査の実施は、本学考古学研究室もかねてから熱望していたところであり、5年次におよんだ壬遺跡の調査に一応の区切りがつけられたのを機に具体的な計画が開始された。昭和61年秋より電話連絡の上で交渉が始められ、実施の目処が立てられたため、昭和62年4月、雪解けを待つて本学文学部教授小林達雄、考古学資料館学芸員青木豊、文学部助手谷口康浩が開田村に出向し、調査地の選定や宿泊施設の借用等について、開田村教育委員会をはじめとする関係者の方々との事前協議が持たれた。調査地点の選定にあたっては、上松町教育長山下生六、王滝中学校教諭神村透の両氏の全面的協力のもとに現地踏査が行われ、昭和43年の調査において有舌尖頭器、石器、無文土器等が出土している小馬背遺跡が選ばれた。また、調査期間は農作物の収穫時期との兼ね合いから9月7日から16日と決定した。

本調査実施にあたっては、長野県教育委員会、開田村教育委員会より終始御指導をいただいた。特に、開田村長神田正知、前村長青樹操、開田村教育長千村博男の各氏には格別のお取り計らいをいただいた。また、地主青樹健一氏には調査の主旨を御理解いただき発掘を承諾していただいたばかりでなく、調査地を休耕として作付を見合わせていただいた。調査参加者は総勢50名にも及び、当初宿舎のことで頭をいためたが、それについても本学の院友である学校法人市郷学園理事長末岡熙章氏の御厚意により、同学園の開田高原研修センターを使用させていただけることとなった。こうして、開田村当局、ならびに地元の方々の御理解と御協力により昭和62年9月に小馬背遺跡発掘調査実現の運びとなった。

第II章 開田高原の環境と遺跡

第1節 開田高原の環境

開田村は長野県木曾郡の北西部にあたり、御岳山（3063.4m）の北東山麓を占める、平均標高1100mの高原性の盆地である。開田高原は木曾川の支流西野川・末川に開析され、ほぼ二分されている。このうち御岳山の東麓側は標高約1100m付近では南北に流れる西野川に開析され、その流域には東岸3段、西岸4段、各比高差1m～2mの低い河岸段丘が発達している。その北東部は御岳山東麓部から北東に向斜する、御岳山麓で最も広くなだらかな高原状地帯が展開し、その中央部を、西野川に合流する冷川が東西に貫流している。その北側を下の原、南側を恩田原という。また盆地東部をほぼ東西に流れる末川沿いには2～3段の段丘面がみられ、恩田原の東部で西野川と合流し、御岳泥流台地を開析して比高30m～50mの急崖をつくり、末川はそのまま南東へ流れ木曾川と合流する。

この地域は、わずかに南隣の三岳村へ西野川となって開けているほかは藤沢峠・長峰峠・野麦峠を境として岐阜県に接し、また北隣の南安曇郡奈川村へは月夜沢峠、東隣の木曾福島町へは折橋峠・地蔵峠を越えなければならない。このような土地柄から、古い風俗習慣を残していることで著名である。

夏期でも平均気温20℃前後、年平均気温7～8℃程度の高冷地気候地帯に属すが、一年を通して降水量が2000mm以上にもなり、中部地方の内陸盆地としては比較的降水量が多い。この条件から、カラマツの疎林や草原を中心とする亜高山針葉樹林帶に照葉樹林の断片群落が混生し、寒冷単作地帯として稲作の限界地にあたる。

開田高原では1万年以上前から人間の生活があったことが確認されているが、歴史的には資料が乏しく、文献に登場するのは中世以降である。このころ飛驒への押えとして西野峠に山城が築かれている。江戸時代には当初、末川村一村であったが、享保9（1724）年の木曾検地の後、支郷西野村が分離独立している。高冷地のため穀物は主に稗や蕎麦の栽培が行われていたが、天明年間（1781～89）から明治初年にかけて水田が開かれ、木曾地方では最も水田の多い村となっている。また、木曾馬の飼育が盛んに行われ、馬の主産地として有名であった。

明治7（1874）年、末川村と西野村とが合併して開田村となり、同14（1881）年に分離、同22（1889）年に再合併して現在に至っている。開田村の村名は、大正4（1915）年の「西筑摩郡誌」に「此村水田の開けること木曾第一なるに因る」とある。現在は別荘地、リゾート施設などの観光資源開発にも力を入れている。開田村の面積は149.39km²で、人口2323人（1987年）である。

第2節 開田高原の遺跡

開田高原における旧石器および縄文文化の研究は、昭和31年の信州ローム研究会による古層遺跡発掘調査に始まり、以後、森鳴稔、樋口昇一、山下生六、神村透各氏らによって精力的に進められてきた。柳又ポイントによって特徴づけられる柳又遺跡A地点・B地点をはじめ、下の原遺跡、西又I・II遺跡、越遺跡など、現在では数多くの重要な遺跡の存在が確認されている。小馬背遺跡の周辺に位置する遺跡のなかで、今回発掘調査に併せて踏査を行った遺跡の概要は以下のとおりである。

柳又遺跡A地点・B地点 木曾郡開田村西野柳又に所在する。恩田原の東隅一帯は柳又原と呼ばれているが、本遺跡はその柳又原でも最も東端の台地の縁辺に位置する。小林国夫氏ほか木曾川地学団体研究会会員と樋口昇一氏、森鳴稔氏を中心に、小林達雄ほか國學院大學学生も加わって、昭和34年から昭和37年にかけて4次にわたる発掘調査が行われた。

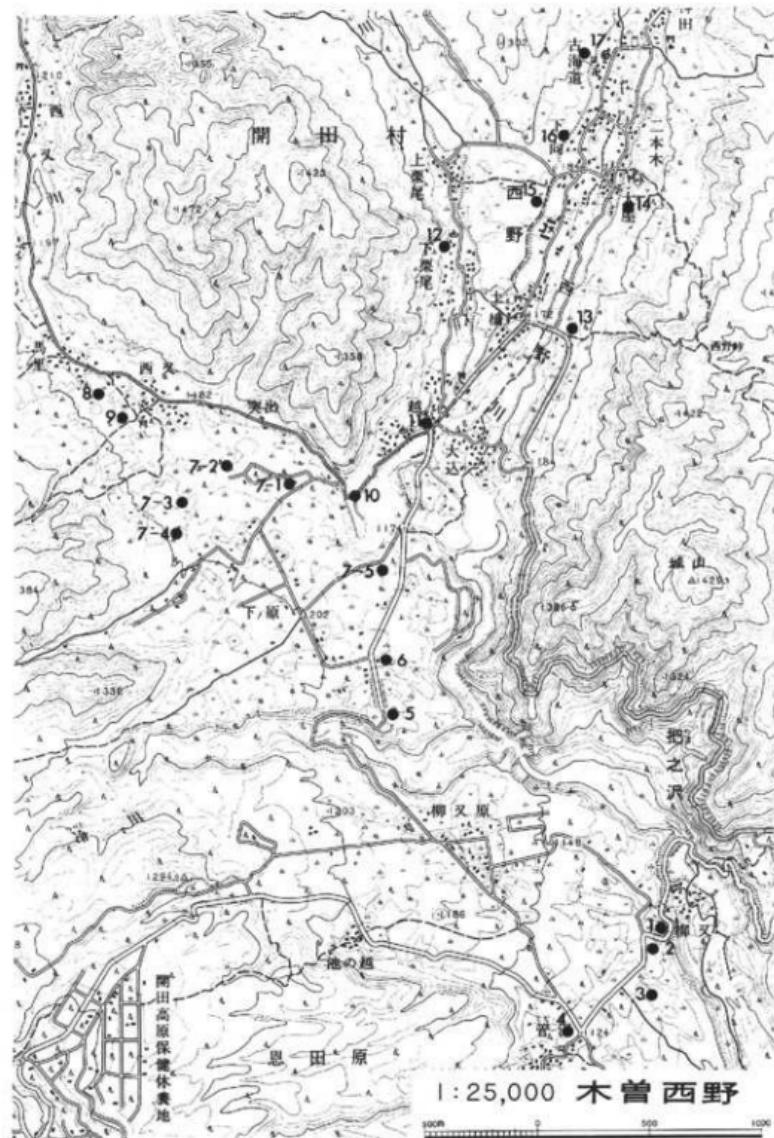
A地点では、旧石器時代を主体とした遺物が検出されている。出土遺物は、I群—ナイフ形石器を主体とするもの、II群—細石刃を主体とするものに分類される。また、B地点出土の遺物は、I群—ナイフ形石器を主体とするもの、およびII群—有舌尖頭器を主体とするものの二群に分類される。特に本遺跡出土の有舌尖頭器は、柳又ポイントの通り名で呼ばれるもので、その発見は縄文草創期における石器文化の研究の先駆となった。

一方、B地点では漸移層中から土器片が出土している。その内容はおよそ3類に分かれる。1類は器壁に織維（禾本科）の圧痕を有する無文のもの、2類は隆起線文土器に類似するもの、3類は爪形文土器に類似のものである。1・2類は胎土の比較から同一個体とされている。

第一次調査のB地点において、遺構が検出されている。ローム層下10cm～20cmの石器出土層位面に、台石とみられる拳大の河原石を中心に石器や剝片が検出されている。また、第一次調査以前にも耕作中にローム層上面より人頭大から拳大の河原石数個と焼土がまとまって出土すると同時に、周辺から剝片が多く出土した。

このように、柳又遺跡は旧石器時代から縄文時代草創期にかけての遺跡であり、その方面的研究の端緒を開いた遺跡の一つとして研究史上重要な位置を占める。

西又I・II遺跡 木曾郡開田村西野馬里に所在し、西又川への緩い傾斜地の最も山よりの小さな沢に臨んだところに位置する。昭和44年10月10日から12日にかけて、樋口昇一氏、神村透氏を中心として調査が行われた。本遺跡においては、6m四方中に台石が数個置かれた石器製作場が検出されている。出土石器の組成は、槍先形尖頭器、有舌尖頭器、そしてスクレイバー、ノッチなどである。その他には、縄文時代草創期に特有の片刃打製石斧が3点と石錐が検出されていることが注意される。



第1図 遺跡の位置と周辺遺跡

番号	遺跡名	所在地	旧石器	縄文時代						不明	平安	備考	
				草	早	前	中	後	晩				
1	柳又A	開田村 西野・柳又	○	○	○	○	○						
2	柳又B	" "	○	○									
3	柳又西南	" "	○	○								A・B	
4	管沢	" 管沢			○	○	○						
5	冷川西台地	" 下の原			○	○					○		
6	つつじが原	" "			○								
7	下の原	" "	○		○	○	○					(1)~(5)	
8	西又I	" 馬里		○									
9	西又II	" "	○	○									
10	川端湖	" 越	○		○	○							
11	越	" "	○		○	○							
12	下栗尾	" 下栗尾									○		
13	西野崎西口	" 把之沢									○		
14	大屋	末川・大屋									○		
15	小馬背	西野・下向	○										
16	下向	" 下向									○		
17	古海道	" 古海道									○		

『開田高原大原遺跡』(神村 1986) から抜刷

第1表 周辺遺跡地名表

越遺跡 木曾郡開田村西野越に所在し、下の原台地の縁辺、西野川に臨む西岸の台地上に位置している。本遺跡では本格的な発掘調査が実施されていないが、広範囲に遺物が散布しており、試掘の結果では黒色土層およびローム層下20cmにわたる遺物包含層が確認されている。かつて耕作中に、黒曜石製の槍先形尖頭器が数点、ローム層中から発見されたことがあるという。今後の調査に期待がもたれる。

小馬背遺跡 木曾郡開田村西野下向に所在する。今回の調査遺跡であるが、昭和43年11月23日から25日にかけて木曾教育会が主催する発掘調査が山下生六氏、神村透氏らにより行われた。その際、遺構の確認が報告されている。遺物は槍先形尖頭器が最も多く、それらの槍先形尖頭器は粗雑な加工を特徴とするものであった。未製品の疑いが持たれる。そのほかに有舌尖頭器や片刃打製石斧、スクレイバーなどの石器と若干の無文土器が出土している。こうした石器群

の組成は縄文時代草創期の特徴を示しており、また併出した無文土器は断片的であり、その関係は明らかではない。しかし、石器群の組成が明らかに草創期のものであり、無文土器もこれらの石器群と共に伴すると考えられる隆起線文土器に属する可能性が考えられる。

その他の遺跡 以上の4遺跡の他に、開田高原に存在する遺跡のなかで小馬背遺跡との関連から重要視されるものを以下に挙げる。

末川谷の最奥に近い、東岸第2段丘上には大原遺跡がある。有舌尖頭器やスクレイバーが検出されている。特に注意すべきこととして、押型文土器に併出するいわゆる銀形石器が出土していることである。土器を伴うかどうか、今後の調査に期待が持たれる遺跡といえよう。

末川、古屋敷台地の東北縁には、古屋敷遺跡A地点がある。遺物は槍先形尖頭器を中心とするが、出土数は比較的小ない。槍先形尖頭器はその形態に富み、中には14cm×6cmの大型のものが含まれている。また、半月形石器と理解されるものがセットされていることが注目される他にサイドスクレイバー・剝片等が検出されている。A地点より200m南方にはB地点があり、小型の石刃、石核、槍先形尖頭器が採集されている。さらにC地点は、遺物としてサイドスクレイバー、エンドスクレイバー、石刃、石核等が検出され、旧石器時代のナイフ形石器のある時期に属するものと考えられる。

西野集落より下の原台地面にある切り通しをやや南下した地点には、黒曜石製のナイフ形石器やノッチ等が採集された下の原遺跡A地点がある。遺物のなかには、柳又遺跡B地点出土のナイフ形石器に比定される要素を持つものも採集されている。

A地点より南に200mほど下がった地点にはB地点がある。浸食のため遺物包含層が地表面となっており、槍先形尖頭器や荒屋型彫刻器等が採集されている。

下の原遺跡ではA地点・B地点の他にも数地点が確認されている。しかし、その内容については、まだ不明な点が多く、今後の調査に期待が持たれるところである。

開田村には、いまだ人の目にふれず地中深く埋没している遺跡が多数存在すると考えられ、今後の調査に大きな期待が寄せられる。

第3節 小馬背遺跡の位置

小馬背遺跡は長野県木曾郡開田村西野2623番地に所在する。そこは御岳山の東北麓に広がる開田高原を南北に流れる木曾川の支流である西野川と、その支流藤沢川によって開拓された平坦な河岸段丘上の東側に位置する。

木曾福島方面から西野川沿いを走る国道361号線は土橋で川を渡り、飛驒高山方面へ向かうが、その土橋から西野川西岸を上流に向かう旧道を走って約500m北上したところに下向という集落がある。西野川の西岸には4段の河岸段丘が形成されているが、遺跡は下向集落から1

段あがった第3段丘面上に位置する。第3段丘面上は幅約100mの広がりをもち、遺跡の範囲は、その段丘面の東端、すなわち段丘崖際から南西方向へと広がるものと考えられている。標高約1188m、現西野川河床面からの比高は約10mである。

遺跡の位置する段丘面上は、いわゆる高原野菜生産地帯であり、キャベツや白菜などの耕作地が広がっている。これらの耕作地は区画化が進んでおり、また耕作機械の導入が積極的になされている。今年度の調査において設定された調査区は、現在耕作の行われている畑地の一画である。地主青樹健一氏がとうもろこしを栽培していた畑地を、本年度の調査のために一時、休耕地として提供していただいた場所である。

この地点より南方を見上げると雄大な御岳山のほぼ全貌を遠望することができる。

小馬背遺跡における前回の調査（昭和43年）は多数の遺物の出土をみている。その調査地点は、正確な位置が現在確認できない状況となっている。しかし、当時の調査関係者の説明を受けたところでは、今回の調査地点の南西方向に近接して位置するらしい。

なお、遺跡名は「小馬背遺跡」と先の調査の際に使用した表記が慣用的に使用されていることから、それに従うこととしたが、現地では「小馬背」を「駒背」と表記している。



第III章 発掘調査の方法とその経過

第1節 概要

発掘調査は、昭和62年9月7日から16日までの10日間にわたって実施された。発掘の方法は、調査区の設定に際し全域に $2\text{m} \times 2\text{m}$ のグリッド法を採用し、出土遺物は全点について出土ポイント・レベルを記録することにした。これは本遺跡の広がりや内容等が不明確であることを考慮に入れてのことである。

現地での作業は、9月8日より開始し、調査区を設定したのち班毎に順次掘り下げを開始した。基準杭の標高は、翌9日に1188.20mと設定された。また発掘調査と併行して遺跡周辺の地形測量を実施し、本年度は遺跡の位置する河岸段丘面の測量を完了した。発掘の前半は、にわか雨等の天候不順にたられたため、作業ははかどらなかったが、11、12日に開田高原研修センターにおいて開催された土偶研究会をはさんでその後は天候が安定し、発掘は15日までに無事終了した。

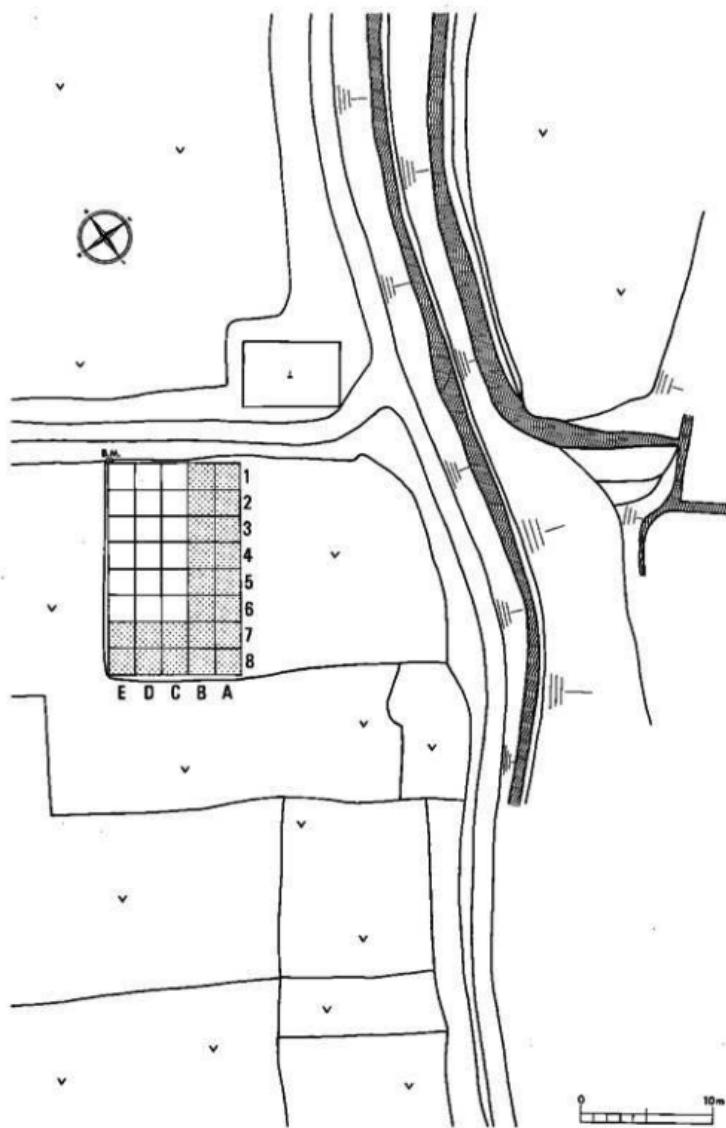
調査地点の現状は周辺を含め整備された畠地であり、大部分はほぼ段丘礫面まで耕作機械による搅乱を受けていた。そのため、遺物の原位置は確認できず、遺構も検出することができなかった。また遺物は有舌尖頭器2点、石器7点の他に、剝片・碎片多数を検出したが、縄文時代草創期の土器は検出されなかった。このため開田高原における縄文時代草創期文化の様相解明という所期の目的は達成することができなかった。

第2節 調査区の設定

遺跡は西野川西岸の4段の河岸段丘のうち第3段丘面上に位置している。段丘面の現状は、段丘崖に平行する農道と直交する農道に区画された耕作地となっている。今回発掘調査を行ったのは、段丘崖に対して直交する農道によって区画された青樹健一氏所有の畠地である。

グリッドの設定にあたって、区画している農道と耕作地との土地境に基本杭を設置し、X軸が農道とほぼ平行となるようにY軸をN30°47'05"Wとした。グリッドは $2\text{m} \times 2\text{m} = 4\text{m}^2$ の方画として、X軸方向に10m、Y軸方向に14mの調査区を設定した。なおグリッドの表示記号は、遺跡の広がりを考慮して、X軸が北西から南東の方向にA、B～Eと大文字アルファベットで、Y軸が北東から南西の方向に1、2～7と算用数字とした。

本年度の調査では、当初A・B-1～7区の14グリッドを調査対象としていたが、調査区南西部において遺物が集中的に検出されたため、その分布状況を確認する目的で新たにY軸方向に2m調査区の拡張を行った。これにより、新たに調査対象としてA～E-8区、C～E-7区を



第2図 調査区と周辺地形図

加え、調査総グリッド数22、総面積88m²となった。

また、4等基本三角点037376（標高1191.02m）より調査地点の北東部に原点移動を行い、基準杭を1188.02mと設定した。

第3節 グリッド別発掘調査の経過

A-1区 段丘疊層まで全面にわたって攪乱が著しく、遺物包含層は確認できなかった。攪乱層中には、大小の礫が多数混入しており、ローム層に至るまでこの礫の状態は続いていた。

遺物は攪乱層から剝片・碎片16点、石鐵1点が検出された。

A-2区 遺物包含層を確認しようとしたが、段丘疊層まで攪乱を受けていることが判明し、そのままローム層まで掘り進めていくことにした。攪乱層からは、ところどころ小型の礫が検出され、ローム層においては、大型の礫が群をなして検出された。

遺物は攪乱層から剝片・碎片29点、石鐵1点が検出された。

A-3区 他のグリッド同様、段丘疊層まで攪乱が進んでおり、遺物包含層は確認できなかった。攪乱層は小さな自然礫を多く含み、それは下層へ行くほど大きくなっていた。またその量も多くなっていた。調査はローム層を掘り下げ終了した。

遺物は攪乱層から剝片・碎片20点が検出された。ローム層では遺物は確認されなかった。

A-4区 当初遺物包含層を確認するために掘り進めていったが、攪乱がひどく確認することはできなかった。その後、段丘疊層を検出したが、攪乱はその直上まで至っていることが判明した。調査はさらにローム層を掘り下げ終了した。

遺物は攪乱層から剝片・碎片36点が検出された。

A-5区 段丘疊層に至るまで全面攪乱を受けており、遺物包含層を確認することはできなかった。ローム層を掘り下げ作業を終了した。

遺物は剝片・碎片68点、石鐵1点が検出されたが、いずれも攪乱層中からであった。遺物は南西方向に集中する傾向があった。

A-6区 遺物包含層の検出を目指して掘り下げていった。しかし、当グリッドにおいても攪乱が全面にわたり、段丘疊層にまでおよんでいたために遺物包含層を検出することはできなかった。調査は段丘疊層を検出し終了した。

なお、当グリッドにおける出土遺物は、攪乱層から有舌尖頭器1点、剝片・碎片143点が検出されている。

A-7区 当グリッドにおいても、遺物包含層を検出することを目指して調査を進めたが、段丘疊層まで攪乱を受けており、遺物包含層を検出することはできなかった。調査は段丘疊層を検出し終了した。

なお、当グリッドにおいては、剝片・碎片163点が検出されているが、擾乱層からの出土であった。

A-8区 表土の掘り下げ後、調査区南壁に沿って約65cmの幅で黒褐色土層を確認した。さらに漸移層、ローム層を掘り下げ、段丘疊層を検出したところで調査を終了した。

遺物はすべて擾乱層から出土し、剝片・碎片52点であった。黒褐色土層、ローム層からの出土はなかった。

B-1区 遺物包含層の検出を目指して作業を進めた。しかし、他のグリッドと同様に全面的な擾乱を受けており、遺物包含層を確認することはできなかった。擾乱は段丘疊層にまで達していた。調査はローム層を掘り下げたところで終了した。

出土遺物数は他のグリッドに比べて極めて少數であり、剝片・碎片が14点検出され、すべて擾乱層からの出土であった。

B-2区 当初は遺物包含層確認を目的として作業を進めたが、擾乱が段丘疊層にまでおよんでいたため、遺物包含層を確認することができなかった。調査は擾乱を取り除いた後、ローム層を掘り下げて終了した。

遺物出土数はB-1区と同様に僅少で、擾乱層から剝片・碎片が9点と石器が1点検出されたにすぎない。

B-3区 遺物包含層の検出を目指して掘り下げた。しかし、当グリッドにおいても他のグリッドと同様に擾乱が著しく、遺物包含層を検出することはできなかった。擾乱は段丘疊層にまでおよんでいた。調査は段丘疊層を検出して終了した。

当グリッドにおける遺物は剝片・碎片20点であり、すべて擾乱層からの出土であった。

B-4区 遺物包含層の検出を目指して掘り下げを開始した。黒褐色土層、漸移層共に擾乱を受けていた。調査は擾乱を除去した後、ローム層を掘り下げ、段丘疊層で終了した。

なお、当グリッドにおける出土遺物は擾乱層からの剝片・碎片42点であった。

B-5区 遺物包含層の確認を目指したが、グリッド全体にわたり擾乱を受けていたため、検出することはできなかった。擾乱は段丘疊層にまで達していた。ローム層を掘り下げ作業を終了した。

遺物は剝片・碎片46点が検出されたが、すべて擾乱層からの出土であった。

B-6区 グリッド全体に擾乱が著しく、遺物包含層を検出することはできなかった。その後、段丘疊層を検出したが擾乱は直上まで達していた。調査はローム層を掘り下げ終了した。

遺物は剝片・碎片が38点、石器が1点検出されたが、いずれも擾乱層からの出土であった。

B-7区 調査は遺物包含層の検出を目指して開始された。しかし、当グリッドでも擾乱が段丘疊層にまでおよんでおり、遺物包含層を検出することはできなかった。調査は段丘疊層

検出の時点で終了した。

遺物は擾乱層から剝片・碎片67点が検出された。

B-8区 表土を掘り下げた段階で、黒褐色土層を調査区南壁に沿って約65cmの幅で確認し、さらに漸移層を確認した。ローム層を掘り下げ、段丘疊層を検出して調査を終了した。

遺物は剝片・碎片49点、有舌尖頭器1点、古銭1点すべて擾乱層から出土した。黒褐色土層および漸移層からの出土はなかった。

C-7区 当グリッドも擾乱が著しく、黒褐色土層および漸移層は確認できなかった。擾乱層を掘り下げローム層を確認し、段丘疊層を検出したところで調査を終了した。

遺物はすべて擾乱層から出土し、剝片・碎片42点であった。

C-8区 表土を除いた後、黒褐色土層を調査区南壁に沿って約65cmの幅で検出した。その後漸移層、ローム層を順次確認した。段丘疊層を検出し調査を終了した。

遺物はすべて擾乱層から出土し、剝片・碎片57点であった。黒褐色土層、漸移層から遺物は検出されなかった。

D-7区 当グリッドも擾乱を著しく受けしており、遺物包含層は確認できなかった。擾乱層を掘り下げローム層を確認し、段丘疊層を検出して調査を終了した。

遺物は剝片・碎片22点すべて擾乱層から出土した。

D-8区 表土を除いた後、調査区南壁に沿って約65cmの幅で黒褐色土層、漸移層を確認して、さらにローム層を掘り下げて段丘疊層を検出し調査を終了した。

遺物はすべて擾乱層から出土し、剝片・碎片35点であった。黒褐色土層、漸移層からの遺物の出土はなかった。

E-7区 当グリッドも擾乱が著しく、遺物包含層は確認できなかった。擾乱層を掘り下げたところでローム層を確認した。さらにローム層を掘り下げ、段丘疊層を検出して調査を終了した。

遺物はすべて擾乱層から出土し、剝片・碎片12点であった。

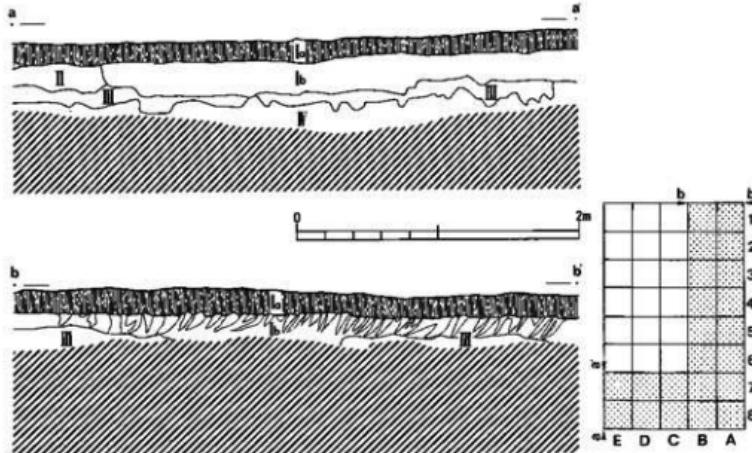
E-8区 表土を除いた後、調査区南壁に沿って幅約65cmで黒褐色土層を確認し、さらに漸移層を確認した。ローム層を掘り下げ、段丘疊層を検出し調査を終了した。

遺物は剝片・碎片24点、石器1点すべて擾乱層からの出土であり、黒褐色土層、漸移層からの出土はなかった。

第IV章 遺跡の基本層序

調査区における層序は、耕作等によって段丘疊層まで擾乱を受けていたが、A-8区東壁、および、E-8区西壁において擾乱を受けていない土層が観察され、そのなかにI~IV層を区分した。段丘疊層は、場所により凹凸がある。南西部分では深くなっている、その部分はIV層土が厚く堆積していた。基本層序として観察した各層の特徴は以下の通りである(第3図)。

- Ia層 調査が開始されるまで耕作されていた明褐色土である。
- Ib層 以前に天地返しのために耕作機械によって擾乱を受けた土である。暗黄褐色土と黒褐色土が混在している。調査区の北側、南側の土層断面には耕作機械の刃の痕跡が明瞭に残されている。
- II層 黒褐色土である。調査区南西部においてのみ確認されており、ローム粒子を微量に含む。粘性は弱く、しまりは良好である。
- III層 暗黄褐色土で漸移層である。径1mm~3mmの白色スコリアを少量に含む。またローム粒子、ロームブロックを多量に含む。粘性はやや強く、しまりは良好である。
- IV層 明黄褐色土でローム層である。径1mm~3mmの白色スコリアを微量に含む。粘性は強くしまりは良好である。



第3図 調査区土層断面図

第V章 遺物とその出土状況

第1節 遺物の出土状況

今回の調査では土器は検出されず、石器（剝片・碎片を含む）のみ1175点が検出された。そのうち製品は有舌尖頭器2点、石鏃7点である。石質別にみると、石器（剝片・碎片を含む）中、98.5%までをチャートが占め、他の石質は1.5%を占めるにすぎない。他の石質はそれぞれ黒曜石1%、玻璃質安山岩0.5%の割合である。

調査区は全体にわたって擾乱が著しく、遺物が本来の原位置において確認できなかったため、遺跡の平面的な広がりや文化層の層位的な位置関係を明確にできなかった。しかし、調査区南西側にやや遺物の集中する傾向が認められ、調査区南方へ遺跡の範囲が広がると考えられたので、あえて平面分布図・垂直分布図を提示した。また、多数の遺物を検出した前の調査地点は、不正確ではあるが、関係者の教示によると本調査区の南方に近接しているらしく、今回の調査の成果として提示した分布図の傾向と符合するものと考えられる。

第2節 調査区出土の石器及び周辺部採集の石器

この調査において出土した石器は、調査区周辺で採集された石器を含め有舌尖頭器2点、石鏃10点の総数12点であった。これを石材別にみるとチャート10点、玻璃質安山岩1点、黒曜石1点であった。

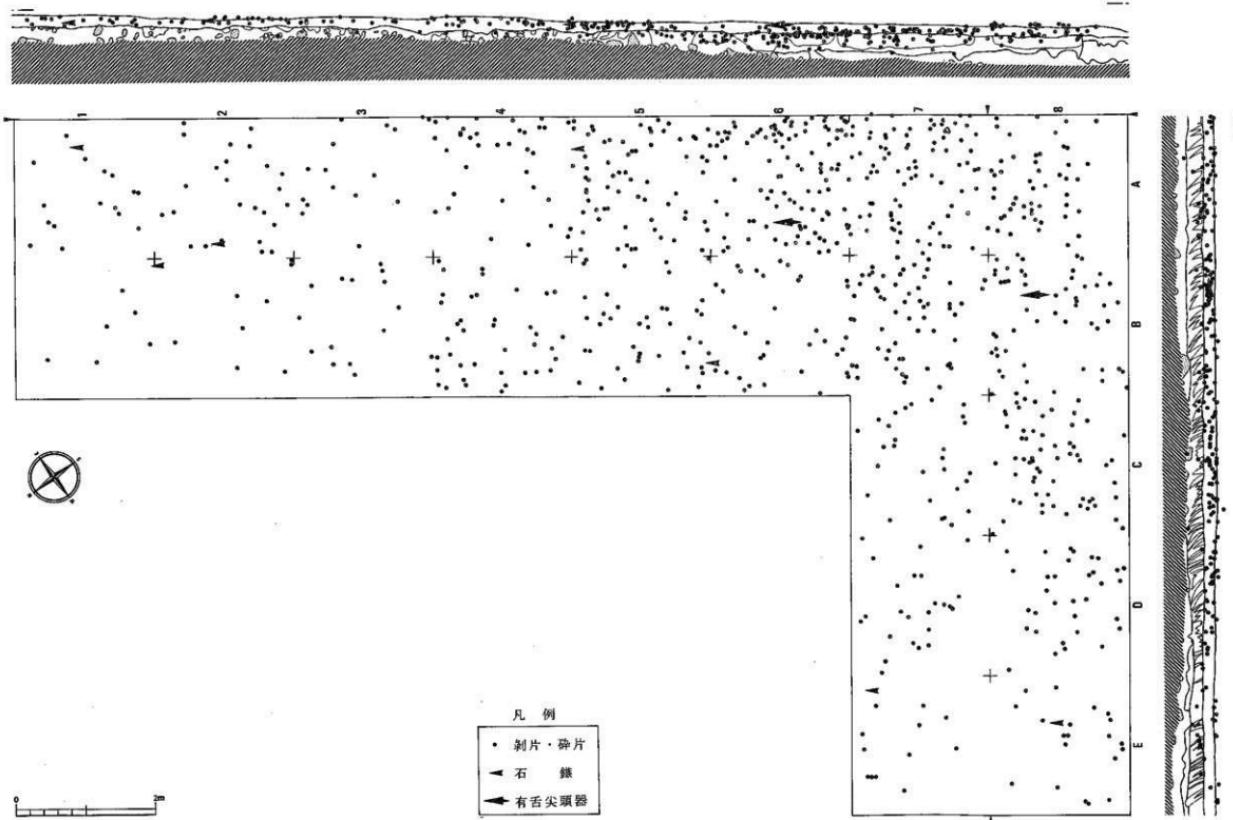
第1項 有舌尖頭器（第5図 1・2）

2点出土している。いずれも調査区出土である。1はA-6区Ia層出土で、先端部および舌部先端を欠損している。玻璃質安山岩製であり、斜状平行剥離を観察できる。舌部の突出がやや小さい。最終的な調整によって、鈍いかえしが作り出されている。現長33mm、最大幅19.5mm、最大厚6mm、重さ2.8gを測る。2はB-8区Ia層出土でチャート製である。先端部が折れている。舌部の突出が小さく、側縁部の調整が粗い。現長32mm、最大幅23mm、最大厚6mm、重さ5.0gを測る。

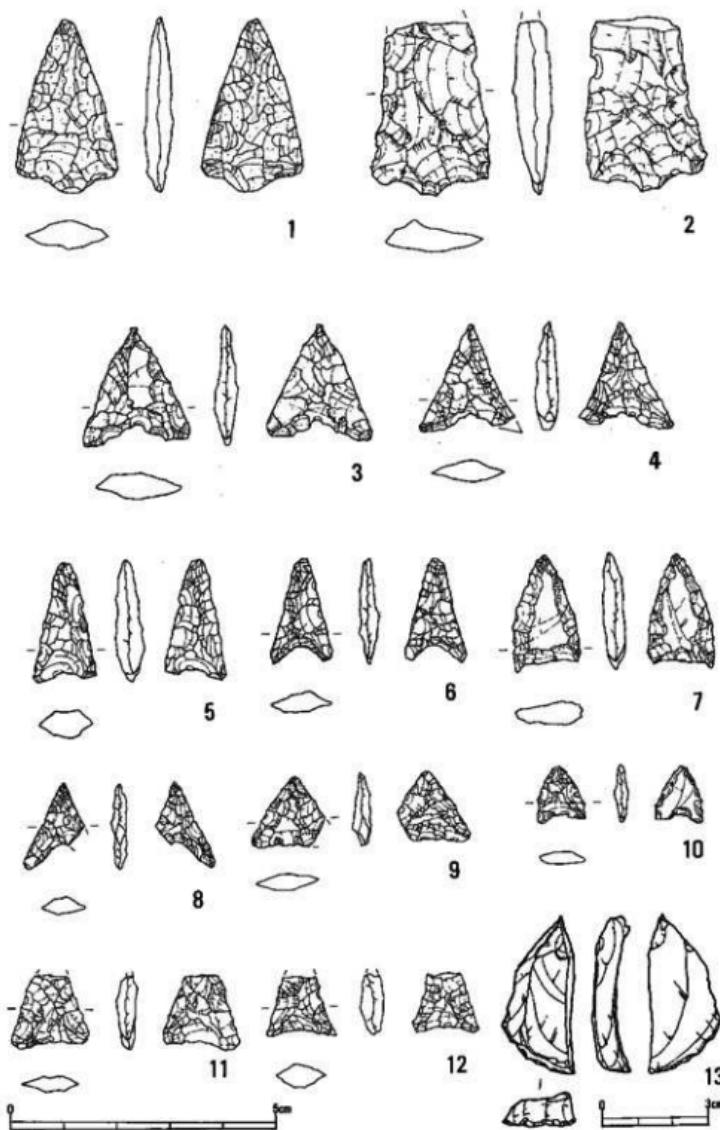
第2項 石鏃（第5図 3~12）

10点を数える。3、4、6、9、10、11、12は調査区出土である。

凹基無茎石鏃 11、12は左右対称形で、非常に浅い抉入によって基部を作り出している。11は表裏ともにわずかではあるが素材剝片の剥離面を残す。いずれも先端部を欠損しているが、側縁部は直線的である。11はB-6区Ia層出土で、現長14mm、最大幅14.5mm、最大厚4mm、重さ0.8gを測る。12はA-1区Ia層出土で、現長10mm、最大幅12.5mm、最大厚4.5mm、重さ0.6gを測る。



第4図 遺物平面分布図・遺物垂直分布図



第5図 小馬背遺跡出土の石器

を測る。6は左右対称形で浅い抉入によって基部を作り出している。E-7区Ia層出土で、現長20mm、最大幅20mm、最大厚4mm、重さ0.5gを測る。3、4はいずれも左右対称形で、浅い抉入によって基部を作り出している。3は片面にわずかに素材剝片の剥離面を残し、先端部に突起を作り出している。側縁部が3はやや外湾しており、4はやや内湾している。3はA-2区Ia層出土で現長22mm、最大幅20mm、最大厚5mm、重さ1.2gを測る。4はE-8区Ia層出土で、現長20mm、最大幅18mm、最大厚4.5mm、重さ0.9gを測る。10は非常に小型で、左右対称形を呈し、非常に浅い抉入によって基部を作り出している。片面に素材剝片の剥離面を広く残し、二次加工が側縁部のみに施されている。側縁部はやや外湾している。A-5区Ia層出土で、現長11mm、最大幅11mm、最大厚2.5mm、重さ0.2gを測る。

平基無茎石礫 9は左右対称形であり、片脚部を欠損しているがほぼ正三角形を呈すると思われる。B-2区Ia層出土で、現長14mm、最大幅11mm、最大厚3.5mm、重さ0.5gを測る。

5、7、8は調査区周辺において採集されたものである。

四基無茎石礫 5は左右対称形で浅い抉入によって基部を作り出している。側縁部は直線的である。現長22mm、最大幅20mm、最大厚5mm、重さ0.5gを測る。7は左右非対称形を呈し、表裏ともに素材剝片の剥離面を広く残し、周縁部にのみ二次加工を施している。側縁部はやや外湾している。現長22mm、最大幅13mm、最大厚5mm、重さ1.2gを測る。8は片脚部を欠損しているが、左右対称形を呈すると思われる。深い抉入によって基部を作り出している。現長22mm、最大幅12mm、最大厚5.5mm、重さ0.3gを測る。

石材は6のみ黒曜石で、他はすべてチャートである。

第3項 二次加工を有する剝片（第5図 13）

13はD-7区Ib層出土で、玻璃質安山岩製である。縦長剝片の側縁部が折れたもので、端部に調整のあとがみられる。現長45mm、最大幅20mm、最大厚9.5mm、重さ8.6gを測る。

第VI章 周辺遺跡採集の遺物

第1節 西又遺跡採集の遺物

今回の概報作成にあたり、小馬背遺跡の南西約1.5kmに位置する西又遺跡の表面採集の遺物を参考資料として提示した。遺物はすべて西又遺跡所在地主奥原彰氏の所蔵品で、氏の御厚意によりここに掲載させていただいた。

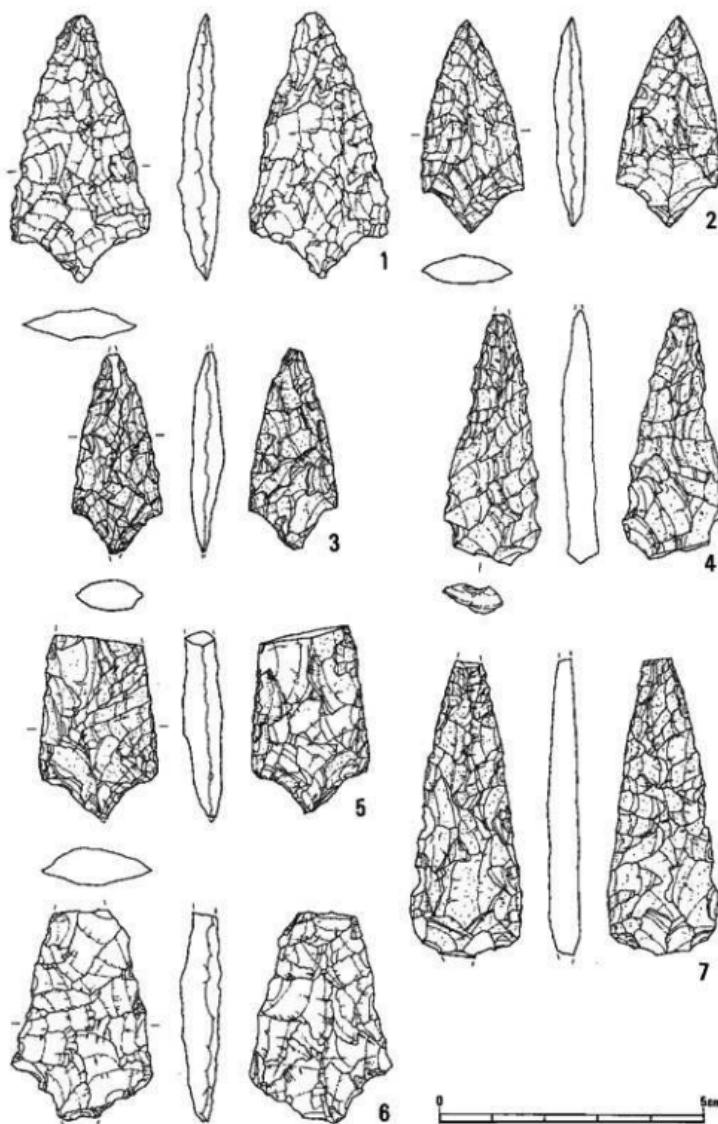
器種別にみると有舌尖頭器7点、槍先形尖頭器9点、石礫10点であり、石材別にみるとチャート10点、玻璃質安山岩13点、黒曜石3点、計26点である。

第1項 有舌尖頭器（第6図 1～7）

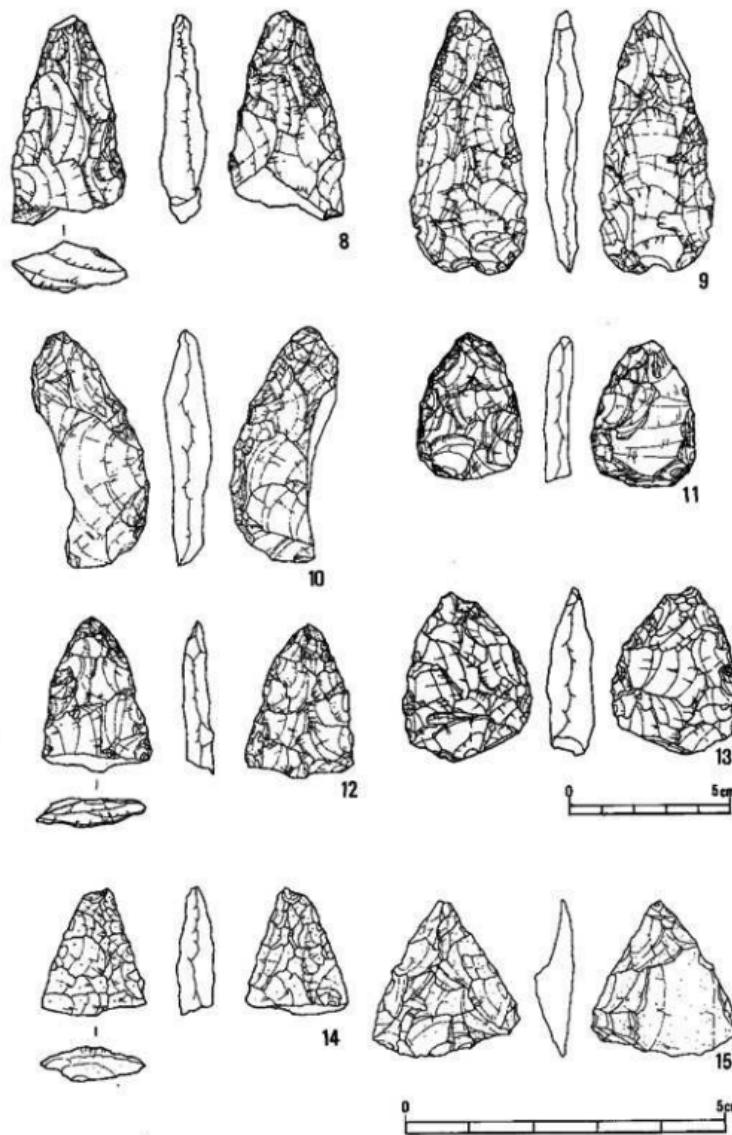
7点が採集されている。1はチャート製で側縁部がやや外湾し、舌部が逆三角形状に突出する。両面調整で最終的な調整によって鋭いかえしが作り出されている。現長40mm、最大幅26mm、最大厚8mm、重さ7.6gを測る。2も側縁部が外湾しており、舌部が逆三角形状に突出している。最終的な加工によって鋭いかえしが作り出されている。玻璃質安山岩製である。長さ39mm、最大幅19mm、最大厚4mm、重さ3.5gを測る。3は玻璃質安山岩製で、側縁部がやや外湾しており、舌部が逆三角形状に突出している。現長38mm、最大幅17mm、最大厚6mm、重さ2.9gを測る。4は玻璃質安山岩製で先端部と舌部を欠損している。側縁部は直線的であり、やや細長い形態を示す。鋭いかえしが最終的な調整によって作り出されている。現長48mm、最大幅15mm、最大厚7mm、重さ4.9gを測る。5は上半部を欠損している。両側縁部は直線的であり、舌部が逆三角形状に突出している。鋭いかえしが最終的な調整によって作り出されている。玻璃質安山岩製で、現長35mm、最大幅22mm、最大厚7mm、重さ5.2gを測る。6は先端部、舌部を欠損している。チャート製である。側縁部はやや外湾しており、舌部は逆三角形状に突出するものと思われる。鋭いかえしが最終的な調整によって作り出されている。現長40mm、最大幅27mm、最大厚8mm、重さ8.6gを測る。7は先端部と舌部を欠損している。側縁部は直線的で細長い形態を示す。鋭いかえしが最終的な調整によって作り出されている。玻璃質安山岩製で現長56mm、最大幅21mm、最大厚6mm、重さ6.7gを測る。いずれも両面に、いわゆる斜状平行剝離を観察できる。

第2項 槍先形尖頭器（第7図 8～15・第8図 16・17）

9点が採集されている。8は下半部を欠損している。チャート製である。現長65mm、最大幅35mm、最大厚14mm、重さ24.2gを測る。9はチャート製で、両面にやや粗い調整が施されている。側縁部はやや外湾している。現長82mm、最大幅37mm、最大厚12mm、重さ34.3gで基部に小さい抉入を有している。10は片側縁部が欠損している。両面に粗い調整が施されており、側縁部が外湾している。チャート製で、現長74mm、最大幅35mm、最大厚14mm、重さ31gを測る。



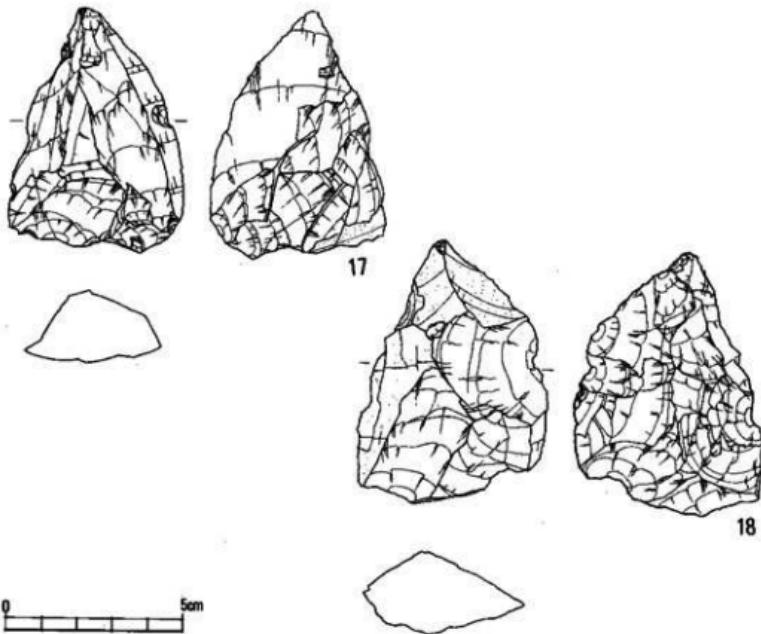
第6図 西又遺跡採集の石器(1)



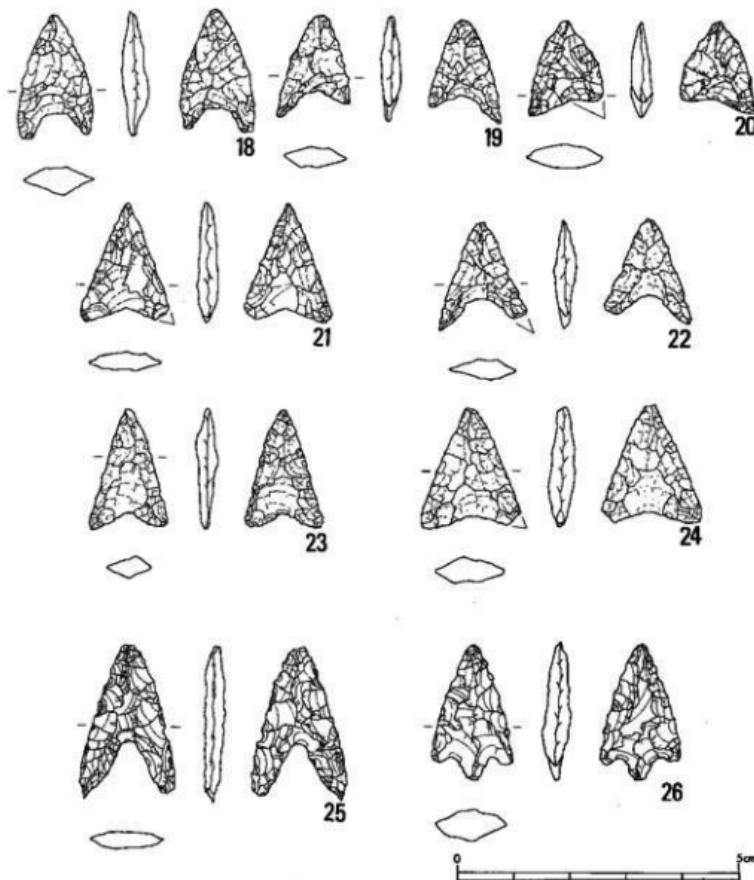
第7図 西又遺跡採集の石器(2)

11は玻璃質安山岩製であり、片面に主要剝離面を残している。片面の側縁部に細かい調整が施されており、外湾している。現長46mm、最大幅32mm、最大厚8mm、重さ11.7gを測る。12は下半部を欠損している。両面に粗い調整が施されているが、先端部には細かい調整が加えられている。側縁部はやや外湾している。チャート製で、現長48mm、最大幅34mm、最大厚9mm、重さ13.9gを測る。13はチャート製で両面に粗い調整が施されており、側縁部が大きく外湾している。現長53mm、最大幅40mm、最大厚4mm、重さ28.9gを測る。14は先端部のみ残している。

玻璃質安山岩製であり、両面に細かい調整が施されている。現長20mm、最大幅19mm、最大厚7mm、重さ4.9gを測る。15は玻璃質安山岩製で正三角形状を呈し、片面に主要剝離面が広く残されている。比較的細かい調整が側縁部に施されている。現長24mm、最大幅22mm、最大厚6mm、重さ2gを測る。16はチャート製であり、極めて粗い調整が施されている。現長70mm、最大幅49mm、最大厚20mm、重さ66.7gを測る。17はチャート製で片面に疊面を残している。両面に極めて粗い調整が施されている。現長75mm、最大幅53mm、最大厚24mm、重さ94.2gを測る。



第8図 西又遺跡採集の石器(3)



第9図 西又遺跡採集の石器(4)

第3項 石鉈（第9図 18~26）

9点が採集されている。

回基無茎石鏃 18、19はいずれも左右非対称形で、側縁部がやや外湾している。深い挿入によって基部を作り出している。玻璃質安山岩製で、18は現長22mm、最大幅13mm、最大厚5mm、重さ1.0gを測り、19は現長18mm、最大幅13mm、最大厚4mm、重さ0.5gを測る。21、23、24は左右対称形で、側縁部は直線的である。浅い挿入によって基部を作り出している。21、24は片脚

部先端を欠損している。いずれも石材は玻璃質安山岩である。21は現長21mm、最大幅15mm、最大厚4mm、重さ0.8gを測り、23は現長24mm、最大幅14mm、最大厚4mm、重さ0.7gを測り、24は現長21mm、最大幅18mm、最大厚4mm、重さ1.0gを測る。22はチャート製で、片脚部先端を欠損しているが、左右対称形と思われる。深い抉入によって基部を作り出している。現長19mm、最大幅15mm、最大厚4mm、重さ0.6gを測る。20は片脚部を欠損しているが、左右対称形と思われる。側縁部がやや外湾している。黒曜石製である。現長17mm、最大幅14mm、最大厚4mm、重さ0.6gを測る。25は左右対称形で極めて深い抉入によって基部を作り出している。側縁部は直線的である。黒曜石製である。現長27mm、最大幅17mm、最大厚4mm、重さ0.9gを測る。

凹基有茎石器 26は左右対称形で、左右からの浅い抉入によって茎部およびかえしを作り出しており、側縁部は直線的である。石材は黒曜石である。現長24mm、最大幅14mm、最大厚5mm、重さ1.2gを測る。

第2節 柳又遺跡A地点採集の遺物

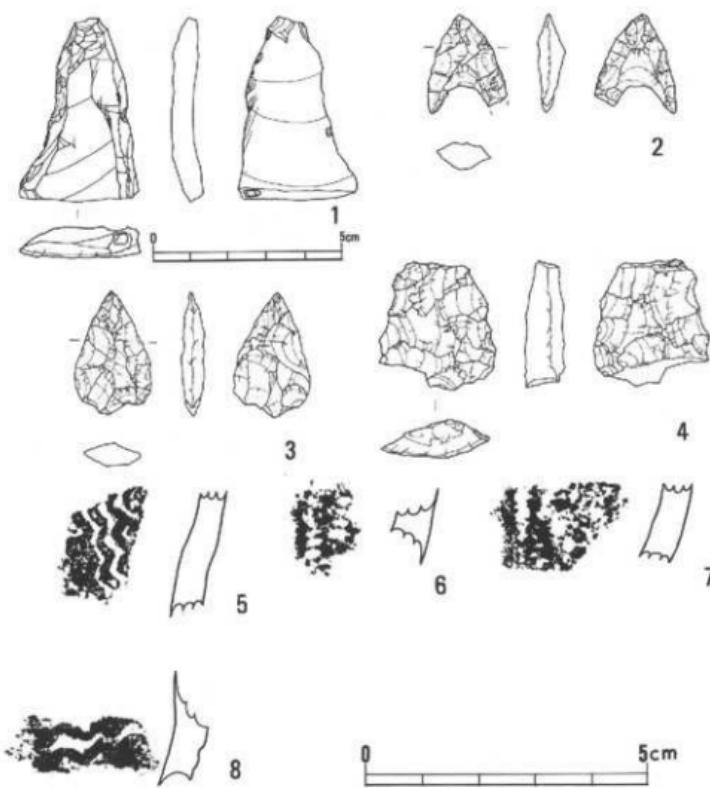
小馬背遺跡の発掘調査に関連して、柳又遺跡A地点で踏査を行った結果、有舌尖頭器2点、石刀1点と土器4点の他、剝片数点を採集した。

第1項 石器（第10図 1～4）

3は、小型で舌部の突出が少ないが、柳又遺跡に特有の有舌尖頭器である。側縁部はやや外湾しており、かえしは最終的な調整によって作り出されている。玻璃質安山岩製である。長さ21mm、最大幅14mm、最大厚3.5mm、重さ0.9gを測る。4は先端部、基部ともに欠損しているが有舌尖頭器であると思われる。チャート製である。現長23mm、最大幅20mm、最大厚7.5mm、重さ3.1gを測る。2は凹基無茎石器で、片脚部を欠損しているが、左右対称形を呈すると思われる。深い抉入によって基部を作り出している。玻璃質安山岩製である。長さ16mm、最大幅14mm、最大厚4.5mm、重さ0.6gを測る。1は黒曜石製の石刀である。端部が折れている。長さ49mm、最大幅31mm、最大厚7.5mm、重さ11.8gを測る。

第2項 土器（第10図 5～8）

6、7は胴部破片で、L Rの原体により回転繩文が施されている。6は器厚8mmを測り、色調は褐色、胎土には白色微粒子を微量に含む。焼成はやや不良。7は器厚4mm～6mmを測り、色調は暗茶褐色で、胎土には白色微粒子を微量に含む。焼成はやや不良。5・8は押型文系土器の胴部破片で、5は山形押型文を縦位に、8は横位に施文している。5は器厚6mmを測り、色調は暗茶褐色で、胎土には砂粒・小石を若干含む。焼成は良好である。8は器厚7mmを測り、色調は暗茶褐色で、胎土には砂粒・白色微粒子を微量に含む。焼成は良好である。いずれも早期に比定されるものである。

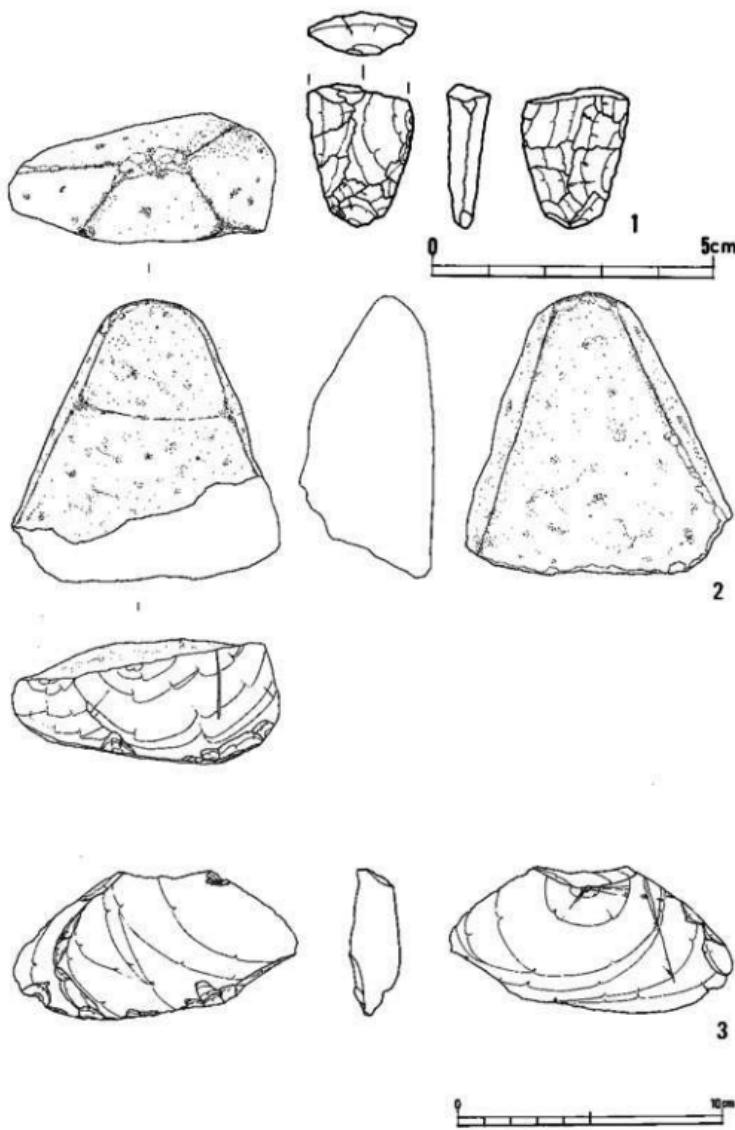


第10図 柳又遺跡A地点採集の遺物

第3節 越遺跡採集の遺物

踏査の結果、砾器1点、槍先形尖頭器1点と剝片数点を採集することができた(第11図)。

1は槍先形尖頭器の基部である。全体的に棱線がつぶれている。砂岩製である。現長25mm、最大幅19mm、最大厚7.5mm、重さ3.1gを測る。2は片刃砾器である。刃部には全体的に刃こぼれが観察され、全体的に棱線がつぶれている。上端部と側面に数箇所の敲打痕があり、いわゆる「敲石」としても利用されたと思われる。長さ107mm、最大幅101mm、重さ539gで砂岩製である。3は横長剝片を素材とし、端部にわずかに不規則な二次加工がみられる。頁岩製である。長さ55mm、最大幅107mm、重さ92.5gを測る。



第11図 越遺跡採集の石器

第VII章 考 察

第1節 調査の成果と問題点

開田高原においては、柳又遺跡をはじめ縄文時代草創期の遺跡が多數確認されている。小馬背遺跡もそれらの遺跡のひとつであり、該期の動向を解明するうえで重要な遺跡と考えられたため今回の調査が行われた。

しかしながら、今回の調査地点はほぼ全面にわたって段丘疊層まで耕作機械による擾乱を受けていたため、期待された成果を得ることができなかった。そのことを考慮に入れて本調査の成果と問題点をまとめてみたい。

出土遺物は、調査区が土層の擾乱を受けていたため本来の原位置が確認できなかったが、石器（剝片・碎片を含む）1175点を検出した。そのうち製品は、有舌尖頭器2点、石鏃10点のみであったが、前回の調査（昭和43年）の成果と考え合わせると、開田高原における縄文時代草創期の石器組成の特徴がよく示されているといえる。また、石質によって分類してみるとチャートが多数を占め、次いで玻璃質安山岩、黒曜石となり、前の調査と同様の石材選択の傾向が見られ、石器の材質にも特徴があることが注意される。

そのほかに、前の調査で出土している無文土器や、柳又遺跡において確認されている隆起線文土器、爪形文土器等の土器が今回の調査では検出されず、所期の目的のひとつであった草創期の石器群と土器との共伴関係は明らかにできなかった。

小馬背遺跡において出土した遺物は、調査区が著しく擾乱を受けてはいるものの、その分布に注意してみると、調査区の南西部に偏在する傾向が認められた。このことは、前回の調査地点と考え合わせて、遺跡の範囲が本年度調査区の南西方向に広がっていることを推定させる。

また、分布する遺物のうち剝片・碎片が98.9%を占めるということは、遺跡の性格を考えるうえで重要であると思われる。前回の調査時においても示唆されたように本遺跡を石器製作址として認識できると考えられるからである。今回の調査では台石等、石器製作址を裏付ける遺物の検出はなかったが、今後の調査が期待される。

今年度の調査では、発掘と併行して柳又遺跡、西又遺跡、越遺跡の踏査を行った。その結果柳又遺跡A地点では、縄文時代早期の土器片4点と、有舌尖頭器2点、石鏃1点のほか剝片が採集され、越遺跡では槍先形尖頭器、蝶器と剝片を採集した。西又遺跡では剝片多數を採集したが、製品は含まれていなかった。しかし、奥原彰氏所蔵の同遺跡採集の遺物には有舌尖頭器や槍先形尖頭器、石鏃という重要な資料が数多く含まれていた。そこでその重要性を鑑みて、各資料の共伴関係等詳細は不明ではあるが、これらの遺物を参考資料として報告した。

以上のように今回の調査では、草創期の石器群と土器の共伴関係などの様相の解明という所期の目的を達し得なかったが、数多くの遺物を収集することができた。そして前述のような成果と問題点を指摘することができた。今後これらの資料の検討と開田高原における発掘調査の進展による縄文時代草創期の様相の解明に期待したい。

第2節 石器に関する考察

今年度の小馬背遺跡の発掘調査によって得られた石器、ならびに西又遺跡の採集遺物（奥原彰氏所蔵）を対象として若干の考察を行う。

石器はその全体の形態によって器種分類を行った。その定義は、鋭い先端部と基部のかえし、舌状の逆三角形の突起を有するものを有舌尖頭器とし、鋭い先端部と基部から成る、木葉形石槍と呼ばれるものを槍先形尖頭器とし、それらより小型で重さがおおむね1 g以下であり、体部が二等辺三角形状のものを石鏃として捉えることにした（第12図）。

この分類によると小馬背遺跡では有舌尖頭器2点、石鏃10点が出上している。西又遺跡採集の遺物（奥原彰氏所蔵）には有舌尖頭器8点、槍先形尖頭器8点、石鏃10点が含まれている。

これらはいずれも刺突具と考えられ、形状の変化の著しい器種であり、特に槍先形尖頭器に形態の差異が著しい。そこで、このうち特に有舌尖頭器と石鏃に関して個別に基準的な分析を試みることにした。

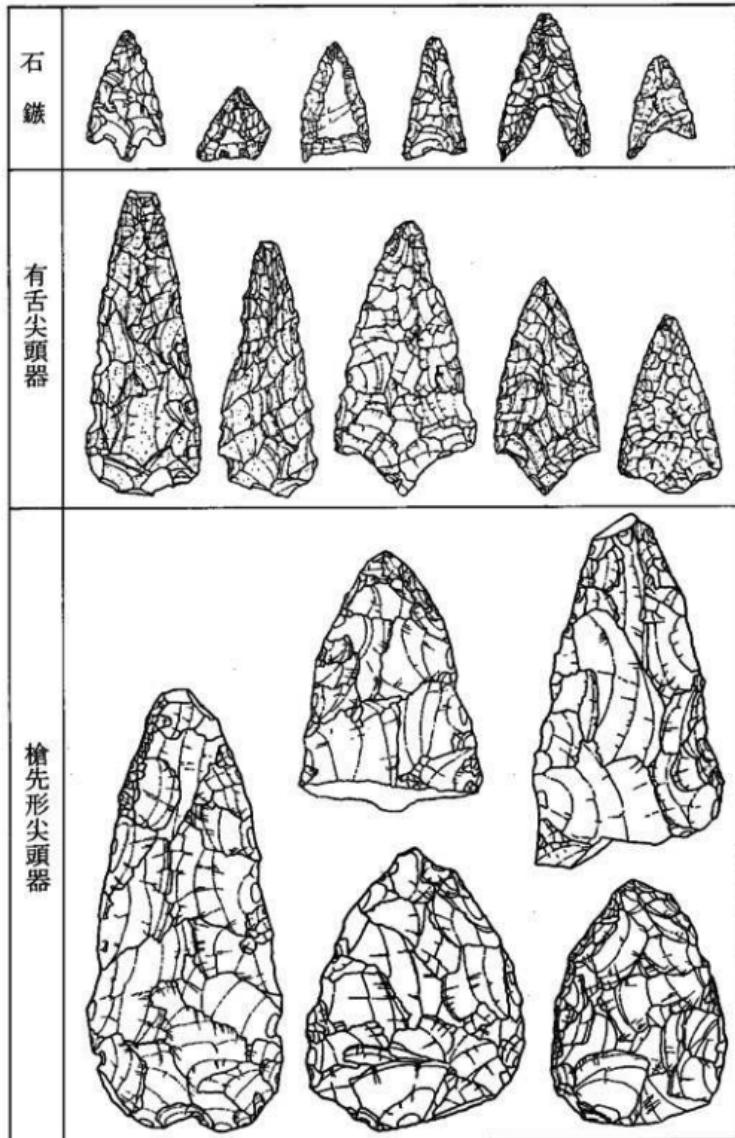
第1項 有舌尖頭器の分類

今年度の発掘調査で、小馬背遺跡では2点の有舌尖頭器が出土している。また西又遺跡採集の石器（奥原氏所蔵）のなかに、有舌尖頭器が8点含まれている。資料数はかなり少なく分析は制約を受けると考えられるが、柳又遺跡出土の有舌尖頭器に対する分類基準（小林 1967）を引用して、有舌尖頭器の形態分類を試みたい。

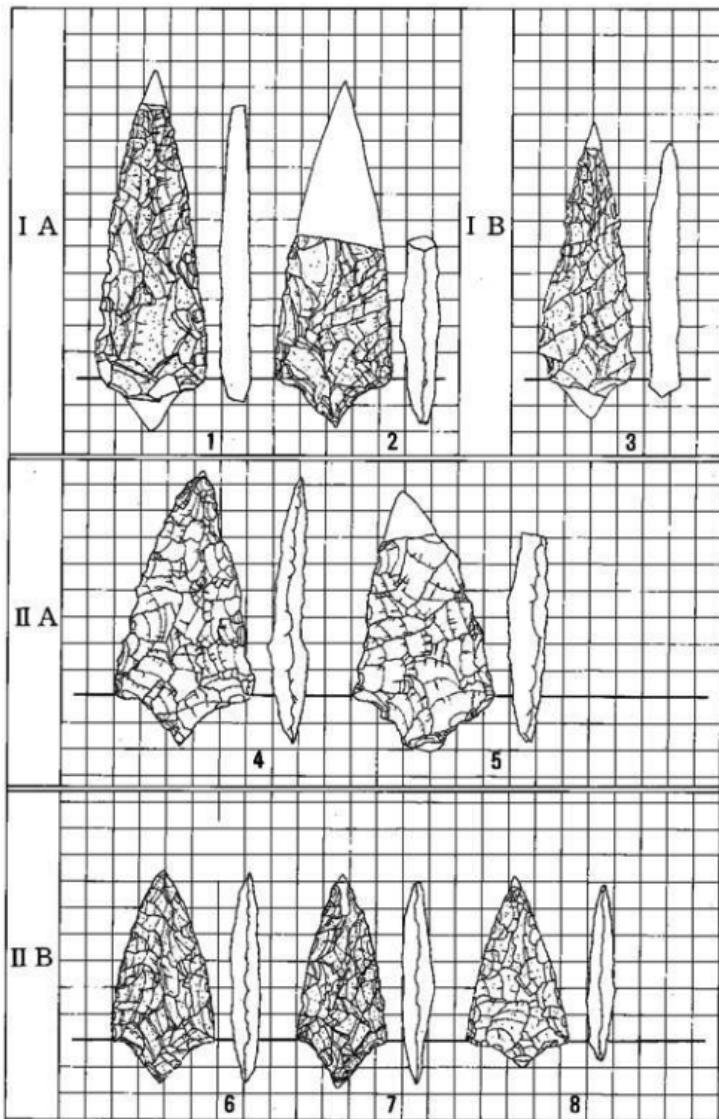
有舌尖頭器は、鋭い尖端部と基部のかえし、舌部の突出によって特徴づけられる石器である。しかし、その形態は一様とはいはず、柳又型、小瀬が沢型、立川型などに細かく類型化しようとする試みもなされてきた。そのなかで柳又ポイントと呼ばれているのも形態は一様とはいはず、さまざまな差異を含んでいるが、逆にまた各々の個体間に非常に類似する要素や共通性を観察できることがわかる。

分析対象の有舌尖頭器を計測して、長さと基部の幅に基づいて分類することにした。その長さと基部の幅の計測値による有舌尖頭器の比較（第14図）と、基部の幅1に対する長さの比率と長さ1に対する基部の幅の比率による形態の比較（第15図）を行い、その2点における差異に着目することにした。

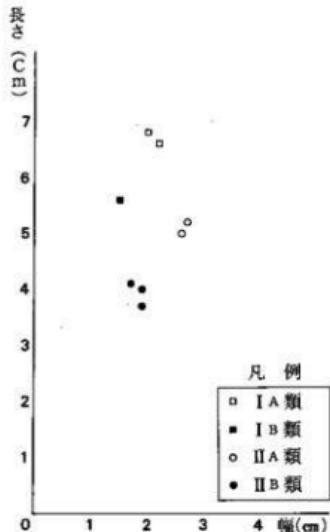
その結果、小馬背遺跡ならびに西又遺跡より出土した有舌尖頭器は、少なくとも4形態に分類



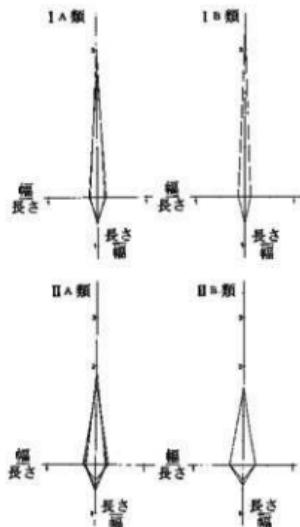
第12図 石器の器種分類



第13図 有舌尖頭器の分類



第14図 有舌尖頭器の比較



第15図 有舌尖頭器形態グラフ

報告図版番号	分類	長さ	幅	長さ 幅	幅 長さ	石 質	出土遺跡	備 考
5-1	II B	37	19	1.95	0.51	玻璃質安山岩	小馬背	先端部・舌部欠損
5-2	-	-	-	-	-	チャート	小馬背	先端部欠損
6-1	II A	52	27	1.93	0.52	チャート	西 又	先端部欠損
6-2	II B	40	19	2.11	0.48	玻璃質安山岩	西 又	
6-3	II B	41	17	2.41	0.41	玻璃質安山岩	西 又	先端部・舌部欠損
6-4	I B	56	15	3.73	0.27	玻璃質安山岩	西 又	先端部・舌部欠損
6-5	IA	66	22	3.00	0.33	玻璃質安山岩	西 又	先端部欠損
6-6	II A	50	26	1.92	0.52	チャート	西 又	先端部・舌部欠損
6-7	IA	68	20	3.40	0.29	玻璃質安山岩	西 又	先端部・舌部欠損
7-14	-	-	-	-	-	玻璃質安山岩	西 又	先端部・基部欠損

註) 長さ・幅はいずれも推定による。

5-2、7-14は分析より除外する。

第2表 有舌尖頭器計測表

できることがわかった。長さと基部の幅の比率によって分類されるものを I 類、II 類とし、さらにそのなかで長さと基部の幅、つまり大きさの絶対値によって分類されるものを A 類、B 類とする。

I A 類 (第13図 1・2)

どちらも西又遺跡採集の有舌尖頭器である。両側縁が直線的であり、1は舌部を欠損しているが、2で観察すると、舌部が逆三角形状に突出し、細長い形状を呈する。2点とも玻璃質安山岩製であり、側縁部への最終的な調整は、先端部から基部への方向での押圧剝離を表裏片面ごとに一側縁連続して行い、その後に舌部の加工が行われていることが観察できる。また、かえしは側縁部や舌部への最終的調整の反対面より押圧剝離を行なって作出していることが観察できる。

長さは 1 が 68mm、2 が 66mm と推定される。基部の幅は 1 が 20mm、2 が 22mm を測る。そして、基部の幅 1 に対する長さの比率は、それぞれ 3.40、3.00 で、長さ 1 に対する幅の比率は 0.29、0.33 である。

I B 類 (第13図 3)

I A 類と同様の形状を有する。舌部が欠損しているが、側縁部調整方法やかえしの作出方法は I A 類と同様のことが観察できる。玻璃質安山岩製で、西又遺跡採集である。

長さは 56mm と推定される。基部の幅は 15mm を測り、I A 類よりやや小さい。幅 1 に対する長さの比は 3.73、長さ 1 に対する幅の比は 0.27 で、長さと幅の比率は近似する。

II A 類 (第13図 4・5)

両側縁がわずかに外方向に湾曲している。最終的調整は、まず舌部に施される。側縁部では基本的には基部から先端部への方向を観察できる。表裏片面ごとに一側縁に連続的に調整を施して、その後にかえしを作出するため再び最後に反対面から押圧剝離を行なっていることが観察できる。石質はどちらもチャートであり、西又遺跡採集である。

長さは 4 が 52mm、5 が 50mm と推定される。基部の幅は 4 が 27mm、5 が 26mm と推定される。基部の幅 1 に対する長さの比率はそれぞれ 1.93、1.92 であり、長さ 1 に対する基部の比は 0.52、0.52 である。I 類に比較すると、長さに対して幅が広いことが理解できる。

II B 類 (第13図 6・7・8)

II A 類と同様の形態を示す。最終的調整は、表裏片面ごとに先端部より基部の方向へ側縁部を加工し、そして舌部を加工して、もう一方の側縁部を基部から先端部への方向で加工する。かえしの作出は、その後に最終加工面の反対面からの押圧剝離によって行なう。このような調整方法の特徴が観察される。石質はいずれも玻璃質安山岩である。6 は小馬背遺跡出土、7、8 が西又遺跡採集である。

長さは 6 が 37mm、8 が 41mm と推定される。7 は 40mm を測る。基部の幅は 6 が 19mm と推定され、7 が 19mm、8 が 17mm を測る。基部の幅 1 に対する長さの比率は 6 が 1.95、7 が 2.11、8 が 2.41 であり、長さ 1 に対する幅の比率はそれぞれ 0.51、0.48、0.41 である。II A 類より形状がひと回り小さいが、長さと基部の幅の比率は近似する。

以上のように 4 形態に分類されたものを見ると、石材は I A・I B 類、そして II B 類では玻璃質安山岩が、II A 類ではチャートが用いられていることが特徴的である。また製作技法に注目してみると、I A・I B 類には最終調整の工程に同様の傾向が認められ、I A・I B・II A 類と II B 類では別々の最終的な調整の工程が看取できる。しかし、いずれも表裏片面ごとに一側縁連続して押圧剝離によって調整し、最後にかえしの部分を側縁部の最終的な調整面からの押圧剝離により作出していることが観察できる。そして、側縁部の最終的調整が深い押圧剝離によってなされることと、連続して一定の方向に調整を加えることから、器面はいわゆる斜状平行剝離と呼ばれる剝離面構成となり、一方、かえしの部分に加えられた調整は、必ず側縁部の調整後に行われる所以、斜状平行剝離とは異なる構成面として観察されるのである。

このように分類された 4 つの形態には、個別の特徴と、それら 4 つに共通する特徴を抽出することができる。この分析は資料数において制約を受けているが、開田高原における今後の調査の進展に伴う資料数の増加によって解消できる問題であり、今後の総合的な分析・検討が必要である。

第2項 石器の分類

石器は、縄文時代における最も代表的な石器の一つであり、狩猟活動の一端を知るうえで重要な遺物である。しかし石器の形態は、時代や地域により様々であり、素材や製作技法等のいろいろな側面から分類が試みられてきた。

石器は着柄されてはじめて狩猟具としての役割を果たすことができる。同じように着柄して使用される石槍について、尖頭部より基部の方が着柄によって形態的な変化が現れやすいということが指摘されている（砂田 1983）、その点では石器についても同じことがいえると考えられる。それゆえに分類するにあたり、基部のみに着目して行うこととした。その結果、以下のような I 類～IV 類に類型化することができた。（佐原真氏の分類名を引用した。）なお、分析の対象とした資料は、小馬背遺跡 10 点、西又遺跡 9 点の計 19 点である。

I 類 基部に挿入のある有茎石器（凹基有茎石器）であり、黒曜石製の 1 点のみがこれに属する。

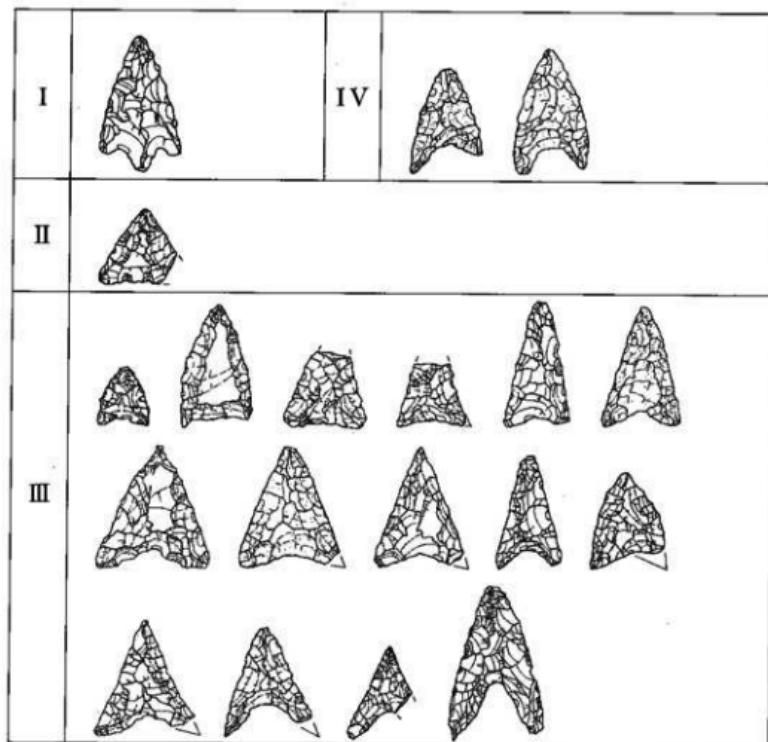
II 類 基部の形状がほぼ直線をなす無茎石器（平基無茎石器）であり、チャート製の 1 点のみがこれに属する。

III 類 基部の形状が内湾している無茎石器（凹基無茎石器）であり、黒曜石製 3 点、チャー

ト製 9 点、玻璃質安山岩製 3 点がこれに属する。なお、本類中には片脚部を欠損しているものが 8 点あるが、これらは欠損している脚を残っている脚と同じ長さと仮定し得るため同類に含めた。

IV類 基部の形状が内湾し、左右非対称を呈する無基石器であり、玻璃質安山岩製の 2 点がこれに属する。本類中には左右非対称と考えられる片脚部欠損の石器 1 点を含む。

以上、石器の基部に着目して分類を行った。I類、IV類は時期が比定できる。I類は縄文草創期に属し、有舌尖頭器の舌部作出技術が繼承された石器と考えられる。IV類は左右非対称の石器であり、縄文草創期に特徴的な形態である（小林 1962）。II類は基部がわずかに内湾しているが、ほぼ直線的で、いわゆる正三角形石器である。よってIII類の 1 種と考えられるが、特徴的なため別類とした。III類とした凹基無基石器は最も多く、15 点を数える。この個々の資料



第16図 石器の分類

について見ると、形状に若干の差異が見られ、細分も可能ではないかと思われたが、明確な分類基準を見出すことはできなかった。最後にII類、III類については、時期的に明確にし得なかったが、I類、IV類の石器は、同時期のものとしては基部が有茎、無茎と形状を大きく異にしている。これは、着柄における技術的差異に起因すると考えられる。したがって、この石器の出現期である縄文草創期においては、石器の着柄技術に統一性はなく、また両類を見比べて、形態にもまだ規格性が見られないということがいえるであろう。このことは、II類、III類にさらに細分が可能なほど種々のバリエーションがあることからも推測される。そして、時期の確定できないII類、III類が同時期の所産としたならば、さらに明確なものとなるであろう。

第3項 石器の材質について

小馬背遺跡の発掘調査により、今回の調査地点から石器（剣片・碎片を含む）1175点が出土している。この石器を石質によって分類することにより、石器製作に使用した石材の特徴が認識できる。石器すべてについてみると、チャートが全体の98.5%と大部分を占める。その他はそれぞれ玻璃質安山岩が1%、黒曜石が0.5%の割合となっており、チャートが圧倒的に多いことがわかる。これは小馬背遺跡の前回の調査においても指摘された特徴であり、これらのこと総合すると、小馬背遺跡における石材の選択に顕著な傾向が認められる。それは前述したことおり、チャートを主体とすることである。

そして、この傾向は以前調査された柳又遺跡A地点・B地点、あるいは西又I・II遺跡においても認められ、開田高原の遺跡全般に共通する特徴とも考えられる。

有舌尖頭器に関する石材選択の傾向性を認めることができる。小馬背遺跡では2点が確認されており、石質はそれぞれ玻璃質安山岩、チャートである。また、今回報告した西又遺跡採集の石器（奥原氏所蔵）には、有舌尖頭器が7点含まれており、そのうち5点までが玻璃質安山岩製であり、他の2点はチャート製である。

確認された有舌尖頭器はいずれも、いわゆる柳又ポイントであり、舌部が逆三角形状に突出し、かえしが発達するという形態上の特徴と斜状平行削離技術による調整が施されているという技術上の特徴を有するが、こうした形態・技術上の特徴に加えて、石材選択のうえで、玻璃質安山岩・チャートを使用するという傾向を指摘できる。

有舌尖頭器などの石器の素材に玻璃質安山岩を用いるのは、岐阜県柳ノ湖遺跡（原・紅村1958）に多くの類例を求めることができる。また、柳又ポイントと同様の特徴を有する有舌尖頭器が数多く発見されている岐阜県中津川市松田遺跡や多治見市虎渓山遺跡E地点（安達 1972）ではその石質にチャートが圧倒的に多いことが特徴として挙げられている。

以上のように、開田高原において、有舌尖頭器をはじめとする石器には、チャートを石材として選択する傾向があり、それは岐阜県方面で同様に顕著であることが指摘される。また柳又

ポイントの石材選択では、チャートとともに玻璃質安山岩を選択する傾向が指摘される。

〈引用参考文献〉

- 赤堀英三 1924 「石器研究の一方法」 人類学雑誌44-3
- 原寛・紅村弘 1958 「岐阜県桃ノ湖遺跡略報」 石器時代5
- 樋口昇一・森嶋稔 1959 「木曾開田高原の無土器文化遺跡－柳又遺跡を中心として－」 信濃11-11
- 小林達雄 1962 「無土器文化から縄文文化の確立まで」（國學院大學創立80周年記念若木祭展示目録） 國學院大學考古学会
- 小林行雄・佐原真 1964 「紫雲出」 香川県三豊郡蛇間町文化財保護委員会
- 樋口昇一・森嶋稔・小林達雄 1965 「木曾開田高原における縄文以前の文化」 信濃17-6
- 小林達雄 1967 「長野県西筑摩郡開田村柳又遺跡の有舌尖頭器とその範型」 信濃19-4
- 神村透 1970 「開田高原での発掘調査から一有舌尖頭器を求めて－」 考古学研究16-3
- 安達厚三 1972 「先土器時代」『岐阜県史』 通史編（原始）
- 砂田佳弘 1983 「石槍」「縄文文化の研究」7 雄山閣出版
- 鈴木道之助 1983 「石鎚」「縄文文化の研究」7 雄山閣出版
- 長野県編 1983 「長野県史」考古資料編3（中信地方） 長野県史刊行会
- 神村透 他 1986 「開田高原大原遺跡」 木曾郡開田村教育委員会

おわりに

今年度の考古学実習は、壬遺跡の所在する新潟県中魚沼郡中里村より長野県木曾郡開田村小馬背遺跡に調査地を移して実施された。開田村には柳又ポイントでつとに著名な柳又遺跡をはじめ、草創期の中核地域として、多くの遺跡のあることが知られている。そして、われわれが手懸けた小馬背遺跡もそのひとつである。

今回、考古学実習の一環として行われた発掘調査は、この小馬背遺跡を通して縄文時代草創期の文化様相を解明しようという試みであり、多くの期待が寄せられた。

9月7日から10日間、高地であるために急変する天気などに左右されながら、調査は進められ、ほぼ予定通りの調査を行うことができた。遺物は、有舌尖頭器を2点確認したが、土器は得られず、期待通りの成果を得るには至らなかった。

その他、この10日間に、博物館の見学や周辺遺跡の見学、あるいは作業終了後の夜の宴会などの楽しい思い出が残された。また、調査進行の遅れをとり戻すための早朝作業や、開田高原全景を撮影するために、城山に重い機材を運んだことなどの苦労が思い出される。

現在、その調査が無事終了して、整理作業の途上にあり、多くの問題点や反省点が提起され、小馬背遺跡の全容解明はその緒に着いたばかりである。今後、発掘調査の成果を踏まえて、問題点の解明に尽力しなければならない。そのことを今後の課題として銘記しなければならない。

最後に、これまでの考古学実習同様に、今回の調査に多大な御便宜を図っていただいた関係各位、関係諸機関には深く感謝の意を表する次第である。特に発掘調査に関する法的手続きを取っていただき、様々な御指導をいただいた長野県教育委員会文化課、開田村教育委員会、終始適切なる御指導、御援助を賜った山下生六、神村透両先生、ならびに開田村長神田正知氏、教育長千村博男氏、また宿舎の便宜を図って下さった学校法人市郷学園理事長末岡熙章氏、そして調査期間中、生活全般にわたりお世話いただいた同学園開田高原研修センターの古畑正美氏、食事の御世話をしていたいた嶽見旅館の御一同に感謝を申し上げます。さらに発掘調査に御理解、御快諾をして下さった地主の青樹健一氏、所蔵の遺物を提供していただいた奥原彰氏に改めて御礼を申し上げます。また現地において有益な御助言をいただいた乙益重隆先生をはじめ見学者の方々にも、巻末に御芳名を記して感謝の意を表する次第です。

発掘関係者一覧（順不同・敬称略）

発掘参加者（実習生） 井坂洋子、井澤純、猪熊竜介、猪股佳二、岡田裕、中山浩彦、西海巡、原田千里、福本由紀、松島利夫、三浦英俊、宮尾亨

発掘特別参加者 石村具美、市野康子、伊藤慎二、今福利恵、宇田敦司、小川岳人、小倉和重、柏谷崇、金子宏章、國府田たま子、小暮伸之、木場幸弘、澤柳秀実、下平博行、白井大雅、杉江敬、助川剛榮、高橋淳子、高橋真実、田中由貴、千田陽子、寺里和久、中村大、中村拓也、賛田明、西山久美子、橋本康司、原祐一、堀江武史、町畑弘子、松永洋子、松本尚子、宮沢賢臣、和田信行（以上國學院大學学生）、黒野美恵子、高瀬友貴（以上江戸川女子短期大学学生）

発掘協力者ならびに機関 長野県教育委員会、開田村教育委員会、長野県埋蔵文化財センター、学校法人市郷学園、開田村郷土館、青樹健一（小馬背地主）、奥原彰（西又地主）、神村透（王滝中学校）、山下生六（上松町教育長）、樋口昇一・丸山徹一郎（長野県埋蔵文化財センター）、森鴎、神田正知（開田村長）、青樹操（開田村前村長）、千村博男（開田村教育委員会教育長）、末岡熙章（学校法人市郷学園理事長）、吉畑正美（学校法人市郷学園開田高原研修センター）、太田喜幸（長野県教育委員会文化課）、吉田隆幸・松田武重（以上開田村教育委員会）、たけみ商店、嶽見旅館、やまか商店

見学者 秋山道生（板橋区教育委員会）、山村貴輝（板橋区四葉遺跡調査会）、米田耕之助（市原市文化財センター）、熊谷常正（岩手県立博物館）、高橋誠（印旛都市文化財センター）、佐藤雅一、星野洋治（以上越後古代史研究会）、吉川義彦（大阪府埋蔵文化財協会）、服部寛喜・砂田佳弘（以上神奈川県立埋蔵文化財センター）、小島俊彰（金沢美術工芸大学）、稻野裕介（北上市教育委員会）、原 寛（岐阜県坂下町）、山本哲也（君津都市文化財センター）、村井実（京都科学標本）、松尾武彦（京都市埋蔵文化財研究所）、富田祐一（市立熊本博物館）、井川達雄（群馬県埋蔵文化財事業団）、達藤佐（国分寺市遺跡調査会）、広瀬昭弘（国分寺市教育委員会）、西本豊弘・八重樫純樹（以上国立歴史民俗博物館）、植木弘（嵐山町教育委員会）、植木智子（嵐山町遺跡調査会）、川口潤（埼玉県埋蔵文化財調査事業団）、石岡憲雄（埼玉県立自然史博物館）、折橋俊英（小学館）、大平雅巳（小学館分室繩文土器大観編集室）、堀越正行（市立市川歴史博物館）、富樫雅彦（新宿区教育委員会）、石原哲彌（高山考古学研究会）、鍛治弘昌（中央大学生）、松浦有一郎（東京国立博物館）、武藤康弘（東京大学文学部）、安孫子昭二・川崎義雄・宮崎博（以上東京都教育府文化課）、新井克持・可児通宏・佐藤宏之・館野孝・原川雄二（以上東京都埋蔵文化財センター）、藤沼邦彦（東北歴史資料館）、神保孝造（富山県埋蔵文化財センター）、太田喜幸（長野県教育委員会文化課）、宮下健司（長野県史刊行会）、平林彰・丸山徹一郎・百瀬忠幸・織田弘実（以上長野県埋蔵文化財センター）、近藤和子（長野県農業試験場）、伊東太作（奈良国立文化財研究所）、

泉拓良(奈良大学文学部)、田川良(奈和同人会)、鈴木保彦(日本大学芸術学部)、中村由克(野尻湖博物館)、細川美千子(兵庫県埋蔵文化財調査事務所)、小林康男(平出遺跡考古博物館)、原田昌幸(文化庁美術工芸課)、梅川勝史(町田市遺跡調査会)、新津健(山梨県教育庁文化課)、小野正文(山梨県立考古博物館)、新谷和孝(立正大学学生)、梶山林繼(國學院大學日本文化研究所)、内川隆志(國學院大學考古学資料館)、浅野光洋(國學院大學久我山高校)、小田由美子(國學院大學大学院)、斎藤佐知子(國學院大學卒業生)、青木正洋・助川朋広・小林青樹(以上國學院大學学生)

整理参加者 石村具美、市野康子、今福利恵、宇田敦司、小川岳人、小倉和重、柏谷崇、國府田たま子、小暮伸之、澤柳秀実、下半博行、白井大雅、杉江敬、助川剛栄、田中由貴、千田陽子、寺里和久、中村大、中村拓也、西山久美子、橋本康司、原裕一、細井由佳理、町畑弘子、松本尚子、宮沢賢臣、和田信行（以上國學院大學学生）

昭和62年9月16日付信濃毎日

縄文草創期獨特の石器2点確認
西高原で発見

相場へ平十力で、おもひて可
手はれるる銀座の新宿（今はお
一萬年前）浦賀の「新宿」に
連続した。
新宿の小林洋輔は、成田の「成
田山」を、同様に「成田山」に
改め、新宿の「新宿」を、成田の
「成田」に改めた。成田の「成
田山」は、成田の「成田」に改
められた。成田の「成田」は、
成田の「成田」に改められた。
一大中心地のひいていた位置
けられぬるに、

は、花の一大盛りで、花火や煙火等の出展など、手合ひや司馬等、本格的な花園開催のなかで、人通りも花火の出店数は少なかった。今後何とか花園祭は、一般的に開催したい。しかし、運営費がかかるので、花園祭は、花火や煙火等の出展など、手合ひや司馬等、本格的な花園開催のなかで、人通りも花火の出店数は少なかった。今後何とか花園祭は、

縄文草創期に挑む

珍しい石槍など多数出る

木曽の開田村「小馬背遺跡」を発掘

文字部助手

周易

國學院大學では、考古学実習課の教員として、西田昌吉歴史教育科の木下忠一博士（東北帝大）が担当。木下博士は、明治時代から、日本古史の研究者として活躍し、『古事記』の翻訳者でもある。この実習課は、木下博士の指導のもと、多くの学生たちに歴史学の基礎知識を学ぶ機会となりました。

時代を仰間にかけての演劇が開幕する。天井ひかる。数寄ニギヤ

教育資金より一方ならず御詔

これが標高約一〇〇メートルの所である。廣沢・長峰・野支の三つの谷は、その大部分が埋没している。沼原の数は引り知れない。今朝の見景は、今まで見て来た中で最も豊かなものである。

教育委員会より一方なしに御指摘され、御支援が得た。また宿舎についても、学校法人市郷学園理事長末岡照宣氏（第73期院友）の御尽力

解し御好意により、同学会の開催に
高原修業センターを使用させていた
たなることができた。

港の国語には、十七年十二名の
船員が乗組んでゐる。その内訳は
船員の特別参加があり、調査團の陣営
は總勢五千名に及ぶ大掛かりなもの
と云つた。

40

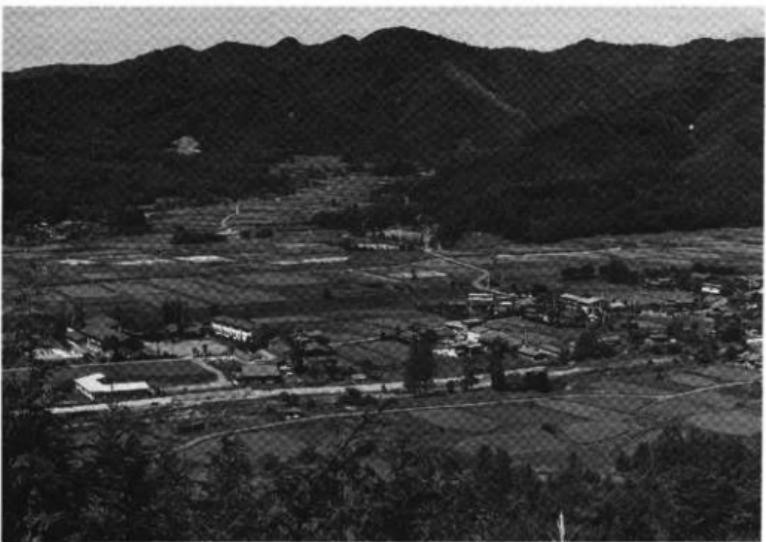
間田高原は櫛岳山（三〇六三メーた所であり、旧石器時代から縄文一帶備から出土遺物・記録の整理

49



開田高原下の原全景（城山山頂より）

圖版 2



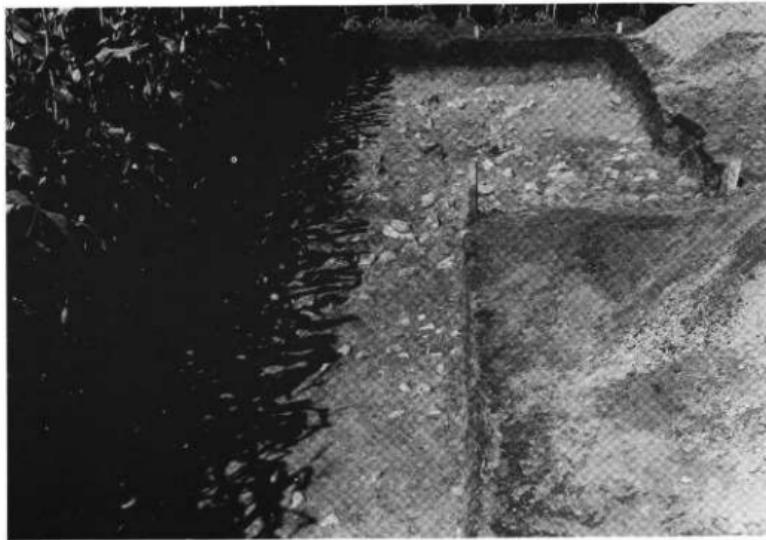
1. 小馬背遺跡遠景



2. 小馬背遺跡現況



1. 完掘状況A・B-1~7区



2. 完掘状況A・B-8区、C~E-7・8区

图版4



1. 基本層序A-7区



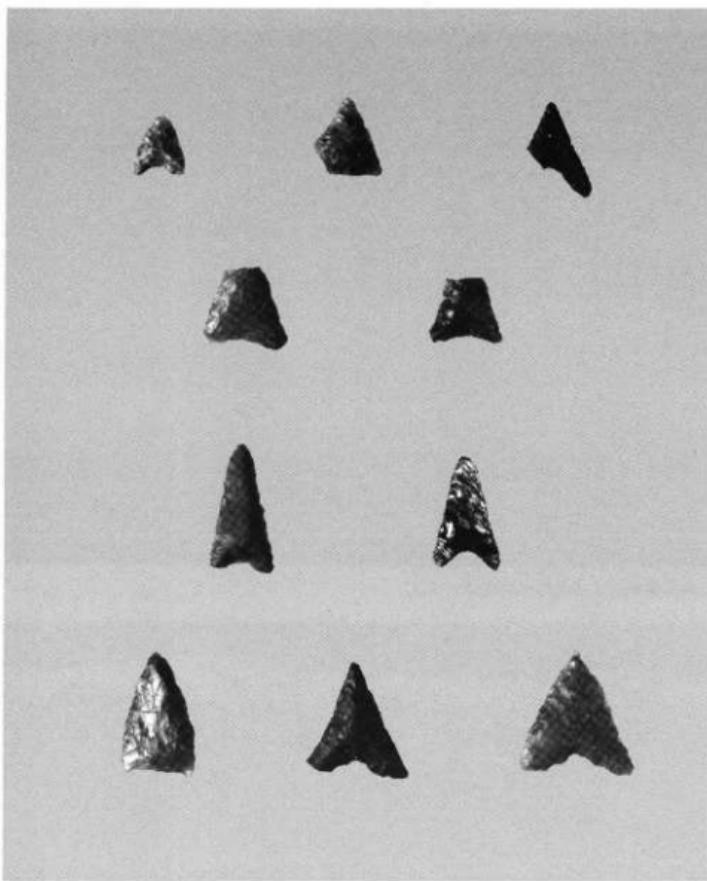
2. 基本層序A-8区



1. 耕作機械による搅乱の状況A-1区



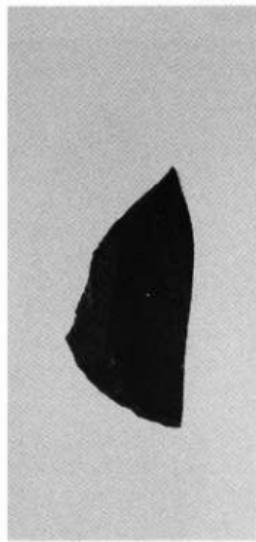
2. 耕作機械による搅乱の状況D-7区



小馬背遺跡出土石鏃



1. 小馬背遺跡出土有舌尖頭器

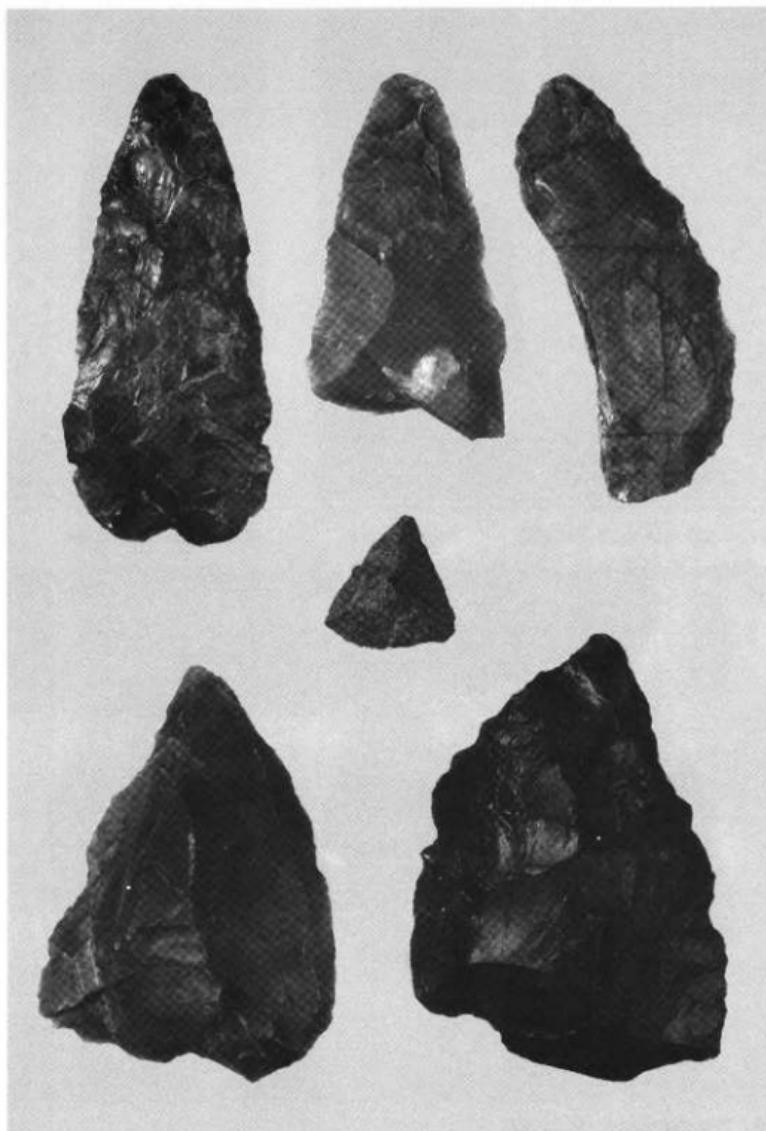


2. 二次加工のある剥片

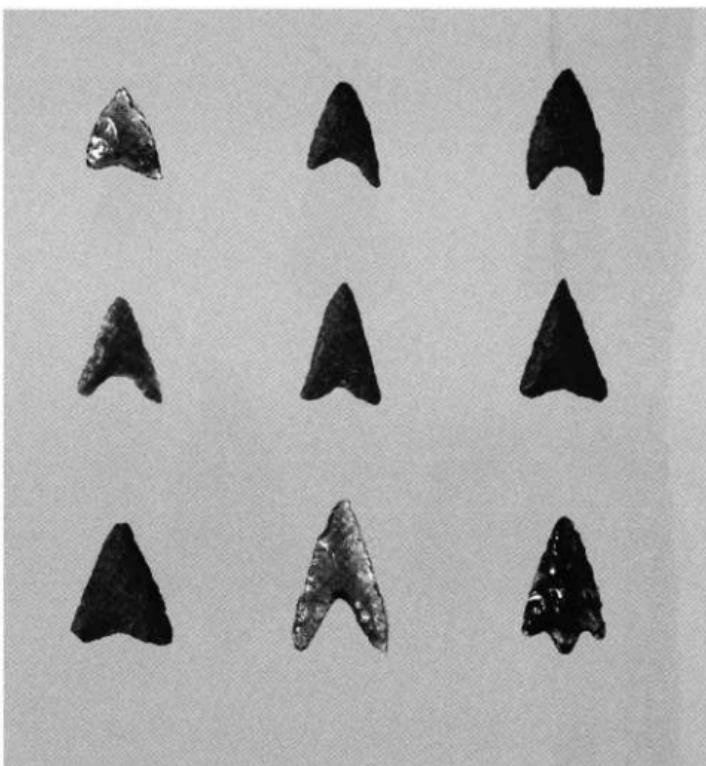


3. 西又遺跡採集槍先形尖頭器

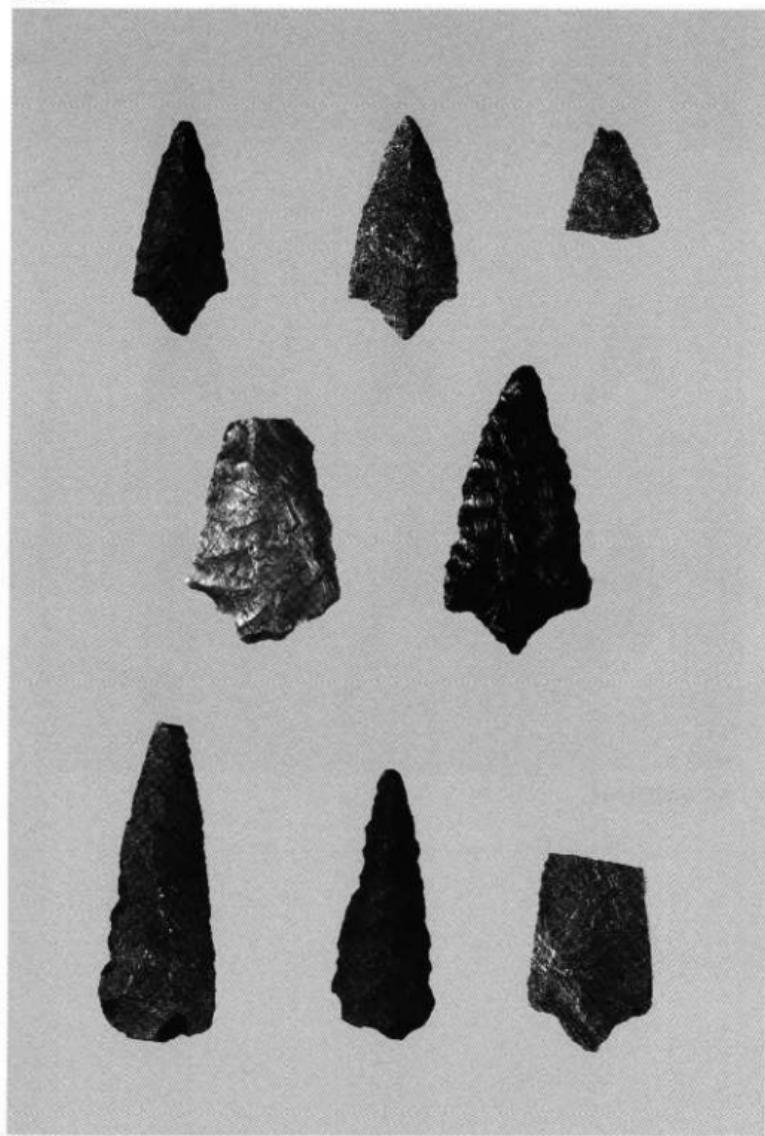
图版8



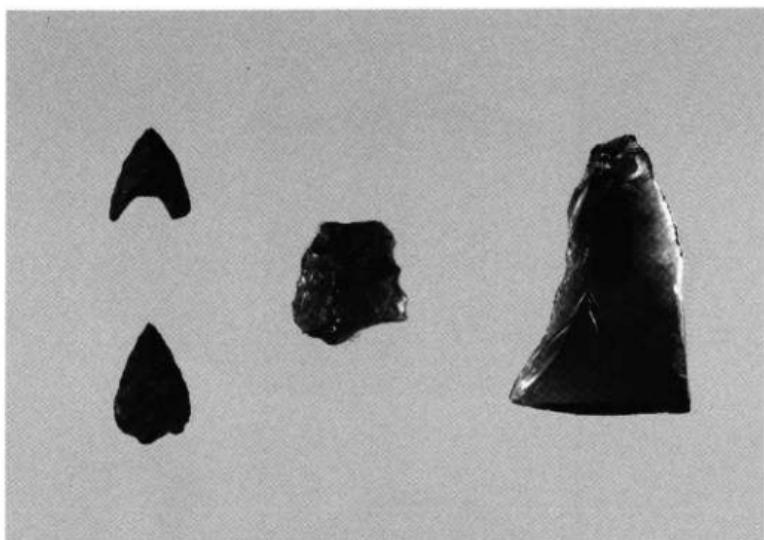
西又遺跡採集槍先形尖頭器



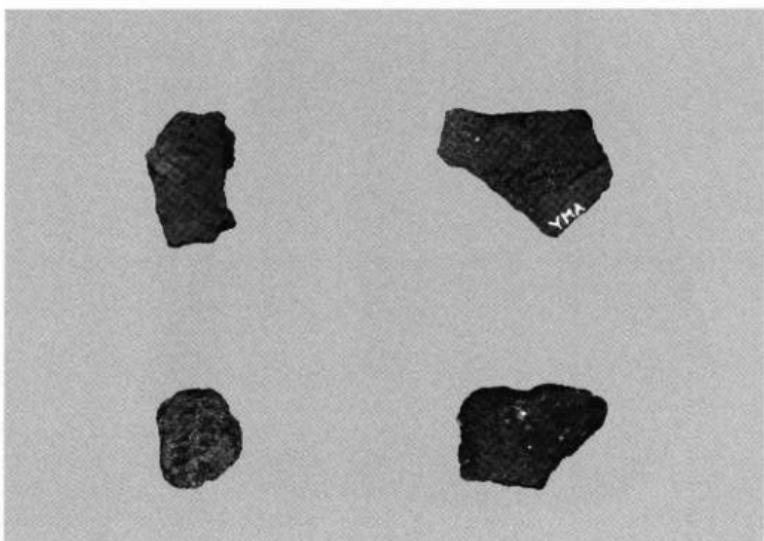
西又遺跡採集石鏃



西又遗址采集有舌尖头器

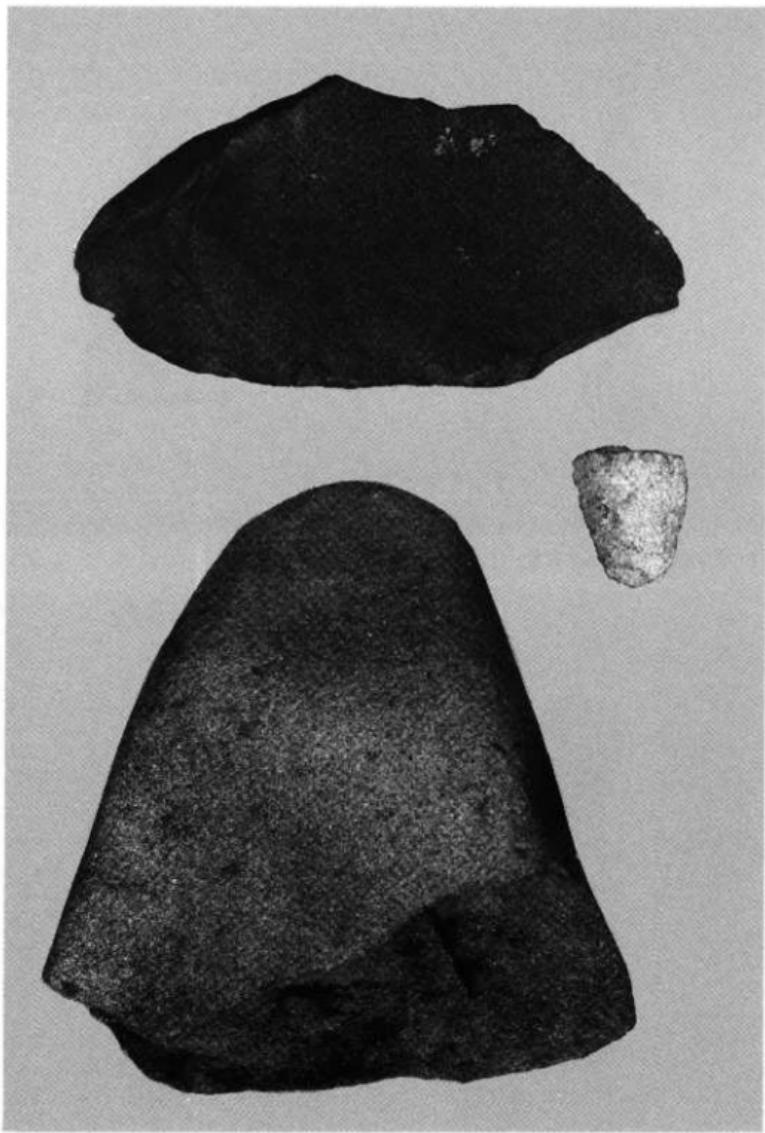


1. 柳又遺跡A地点採集石器



2. 柳又遺跡A地点採集土器

图版12



越遗址采集石器



発掘作業風景



地元の方にとうもろこしをいただきて休憩中

図版14



1. 発掘作業風景



2. 整理作業風景



九藏峠より開田高原・御岳山を望む

國學院大學文学部考古学実習報告 第15集

小馬背遺跡

長野県木曾郡開田村

昭和63年3月30日 印刷

昭和63年3月31日 発行

編集 小林達雄

印刷 潤東京プリントサービス

発行 國學院大學文学部

考古学研究室

〒150 東京都渋谷区東4-10-28

TEL 03(409)0111